区分4

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）

平成２８年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト
「地域の幸福の多面的側面の測定と持続可能な多世代共創社会に向けての実践的フィードバック」

研究代表者　内田 由紀子
（京都大学こころの未来研究センター
特定准教授）

目次

１．研究開発プロジェクト名 2

２．研究開発実施の要約 2

２‐１．研究開発目標 2
２‐２．実施項目・内容 2
２‐３．主な結果 2

３．研究開発実施の具体的内容 3

３‐１．研究開発目標 3
３‐２．ロジックモデル 5
３‐３．実施方法・実施内容 6
３‐４．研究開発結果・成果 13
３‐５．会議等の活動 52

４．研究開発成果の活用・展開に向けた状況 54

５．研究開発実施体制 54

６．研究開発実施者 56

７．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 57

７－１．シンポジウム等 57
７－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 57
７－３．論文発表 58
７－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 58
７－５．新聞報道・投稿、受賞等 59
７－６．知財出願 60

１．研究開発プロジェクト名

地域の幸福の多面的側面の測定と持続可能な多世代共創社会に向けての実践的フィードバック

２．研究開発実施の要約

地域社会レベルで生じる幸福にまつわる諸側面を測定する指標（「地域の幸福の多面的指標」）を、複数の地域を比較して開発し、多世代共創に及ぼす影響を検証する。開発指標について、指標の汎用化と地域へのフィードバックを行う。また、開放的コミュニティの要素分析と地域の幸福の諸側面との関係性を分析する。

２－１．研究開発目標

（１）地域の幸福の概念整理
（２）地域の幸福の諸側面と関連する変数のストラクチャの提示
（３）地域との協力関係の維持
（４）地域の開放性と個人の幸福に関する調査
（５）多世代型の向社会的行動の行動指標測定

２－２．実施項目・内容

（１）　地域の開放性と幸福を測定するための社会調査
（２）　報告会
（３）　多世代型の向社会的行動の行動指標測定
（４）　国際比較調査の準備

２－３．主な結果

（１）　地域の排他性と関連する地域の特性
　①　幸福感の多面的側面は地域の排他性とは関連しないこと
　②　若い世代との交流は排他的意識と負に関連すること
　③　自他の幸福相関は向社会的行動と正に関連すること
　④　バランス志向的幸福感は地域の健康を上げること
　⑤　ごみ分別など自治体活動参加は、幸福感や畏敬感情と関連すること
（２）　報告会
　昨年度実施した幸福感と社会関係に関わる調査のフィードバックを、地域住民に対して行った。
（３）　行動指標測定による幸福のネットワーク性
　住民同士の社会的ネットワークの特徴によって、自治体活動への参加を説明できることが明らかになった。
（４）　国際比較調査のための準備第一段階完了
　アメリカでの調査実施に向けて日本で使用した調査項目の英訳を行い、さらに英訳の妥当性を確認するための予備調査を実施した。

３．研究開発実施の具体的内容

３－１．研究開発目標

平成28年度研究開発計画より、以下を研究開発の目標とした。

（１）全体目標およびリサーチ・クエスチョン

① 地域社会の幸福に関連する多様な側面（平均的高さ、住民間の分散の大きさ、住民間の共変・相関関係）は、地域内外との関わりや、相互依存性への気づきと関連するか？

② 地域社会の幸福に関連する多様な側面（平均的高さ、住民間の分散の大きさ、住民間の共変・相関関係）の測定とフィードバックは、相互依存性への気づきや地域外とのつながりを介して、多世代共創をもたらすか？

③ 多世代が関わることならびにソーシャルキャピタルの効果はどのようなものか？

④ 多世代で共創するシェアド・リアリティの効果はどのようなものか？

（２）今年度の目標

１）地域の幸福の概念整理

これまでの心理学における幸福感研究ならびに、平成27年度までの研究開発の結果（地域における幸福の諸側面の測定方法）を踏まえ、理論的・経験的両面から検討し、幸福に関する多面的指標を開発する。

２）地域の幸福の諸側面と関連する変数のストラクチャの提示

幸福の多面的側面が地域社会のソーシャルキャピタルとどのように関連し、また、住民の向社会的行動や多世代共創、ひいては地域社会の持続可能性とどういう関係を持つのか、その構造を示す。

３）地域との協力関係の維持

地域のリーダーおよび一般住民、協力企業、協力者に対し、調査のフィードバックを行い、この先の研究開発の基盤を築く。

４）地域の開放性と個人の幸福に関する調査

「地域の開放性」に関する調査（平成28年7月15日提出「今後の追加検討事項ならびに予算申請」）を実施し、地域における幸福の諸側面との関係を明らかにする。

５）多世代型の交流行動の行動指標測定

小型ウェアラブルセンサを住民に貸与し、地域内での日常的な移動や他者との交流を観測する。所持する住民の拠点での在所の同期を記録し、滞在者同士の時間をデータとして社会ネットワークを同定する。本研究開発では、この新しい技術が住民の幸福や地域に対する向社会的な態度とどのように関連するかについて検討する。

６）国際比較調査の準備

地域の幸福ならびにソーシャルキャピタルに関する知見が他の国の文化でどこまで一般

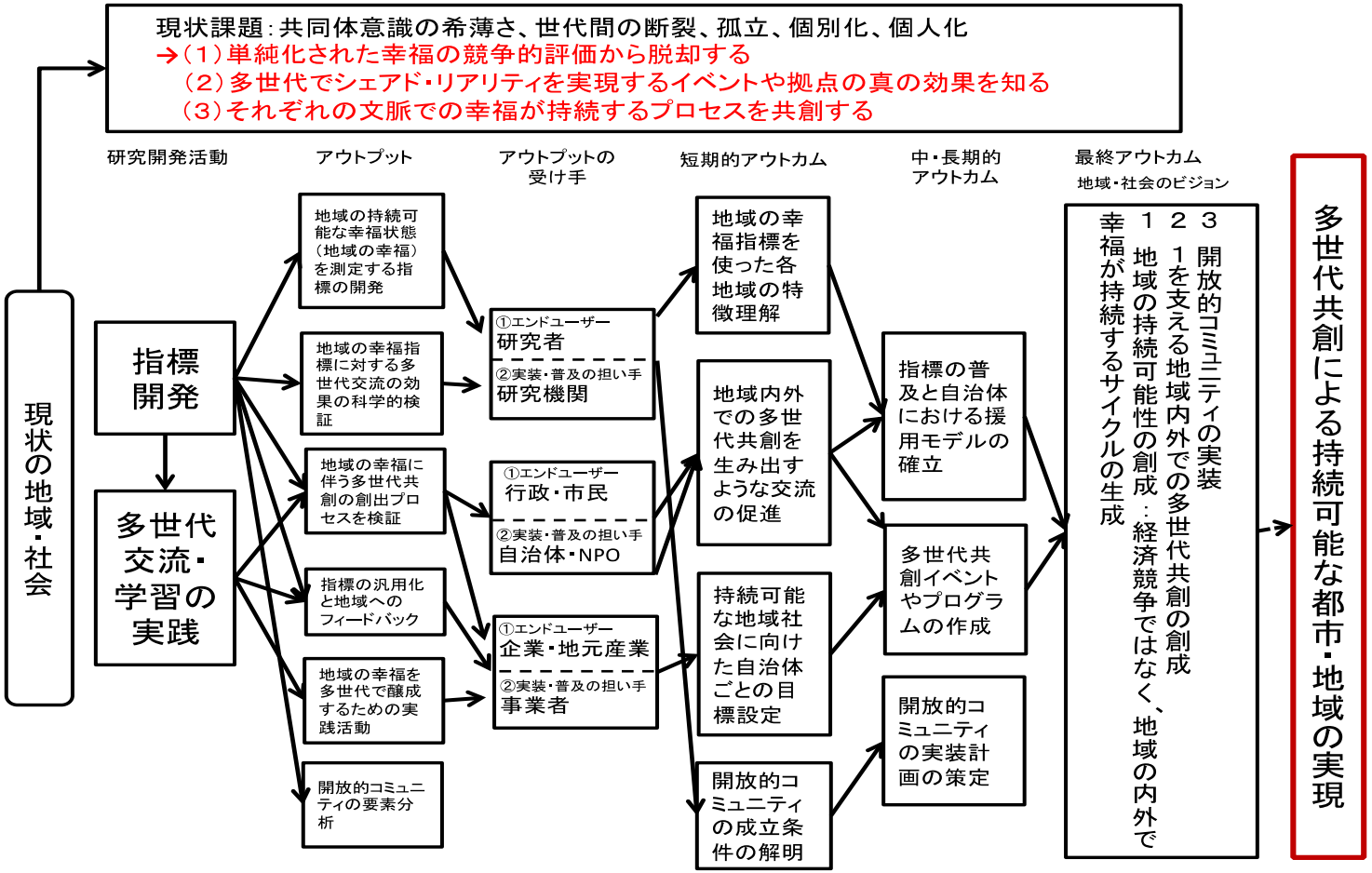
化できるかを検討する。そのため、これまでの日本での質問紙調査で用いた主要な概念の測定項目について厳密な英語翻訳を行い、国際比較調査を準備する。その際、プロジェクトの知見が国際的にどれほど一般化できるか/日本に特有のものであるか、厳密な比較による検証を可能とするため、逆翻訳法と国際的検討を経た調査作成を行う。

（３）背景

現代日本は、競争の原理が強まり、社会的なつながり（ソーシャルキャピタル; Social Capital）や世代間の共創的な関係も減退している。その背景に、世界的に「個人の幸福」のみが目指され、指標化されてきたという経緯がある。

この背景を受け、本プロジェクトでは、個人の幸福を超え、社会やコミュニティにある幸福状態を多面的に測定する指標パッケージの開発と汎用化を行うことを第一の目標とする。次に、多世代共創が維持される地域モデルを作成し、新たな指標が地域の持続可能性に貢献する意義を日本の自治体や企業、ならびに国際的に発信することを本プロジェクトの目標とする。これにより、超高齢社会の日本から実証的地域モデルを提案し、他国への応用に繋げることが最終的な目標である。

３－２．ロジックモデル


現状課題：共同体意識の希薄さ、世代間の断裂、孤立、個別化、個人化
→（1）単純化された幸福の競争的評価から脱却する
（2）多世代でシェアド・リアリティを実現するイベントや拠点の真の効果を知る
（3）それぞれの文脈での幸福が持続するプロセスを共創する
研究開発活動
アウトプット
アウトプットの受け手
短期的アウトカム
中・長期的アウトカム
最終アウトカム
地域・社会のビジョン
現状の地域・社会
指標開発
多世代交流・学習の実践
地域の持続可能な幸福状態（地域の幸福）を測定する指標の開発
地域の幸福指標に対する多世代交流の効果の科学的検証
地域の幸福に伴う多世代共創の創出プロセスを検証
指標の汎用化と地域へのフィードバック
地域の幸福を多世代で醸成するための実践活動
開放的コミュニティの要素分析
①エンドユーザー
研究者
②実装・普及の担い手
研究機関
①エンドユーザー
行政・市民
②実装・普及の担い手
自治体・NPO
①エンドユーザー
企業・地元産業
②実装・普及の担い手
事業者
地域の幸福指標を使った各地域の特徴理解
地域内外での多世代共創を生み出すような交流の促進
持続可能な地域社会に向けた自治体ごとの目標設定
開放的コミュニティの成立条件の解明
指標の普及と自治体における援用モデルの確立
多世代共創イベントやプログラムの作成
開放的コミュニティの実装計画の策定
１　２　３
１を支える地域内外での多世代共創の創成
地域の持続可能性の創成：経済競争ではなく、地域の内外で幸福が持続するサイクルの生成
多世代共創による持続可能な都市・地域の実現

３－３．実施方法・実施内容

本報告書では、以下の実施方法によって実践活動と社会調査による指標開発を実施し、それらの実践とデータに基づいて報告と論考を行う。

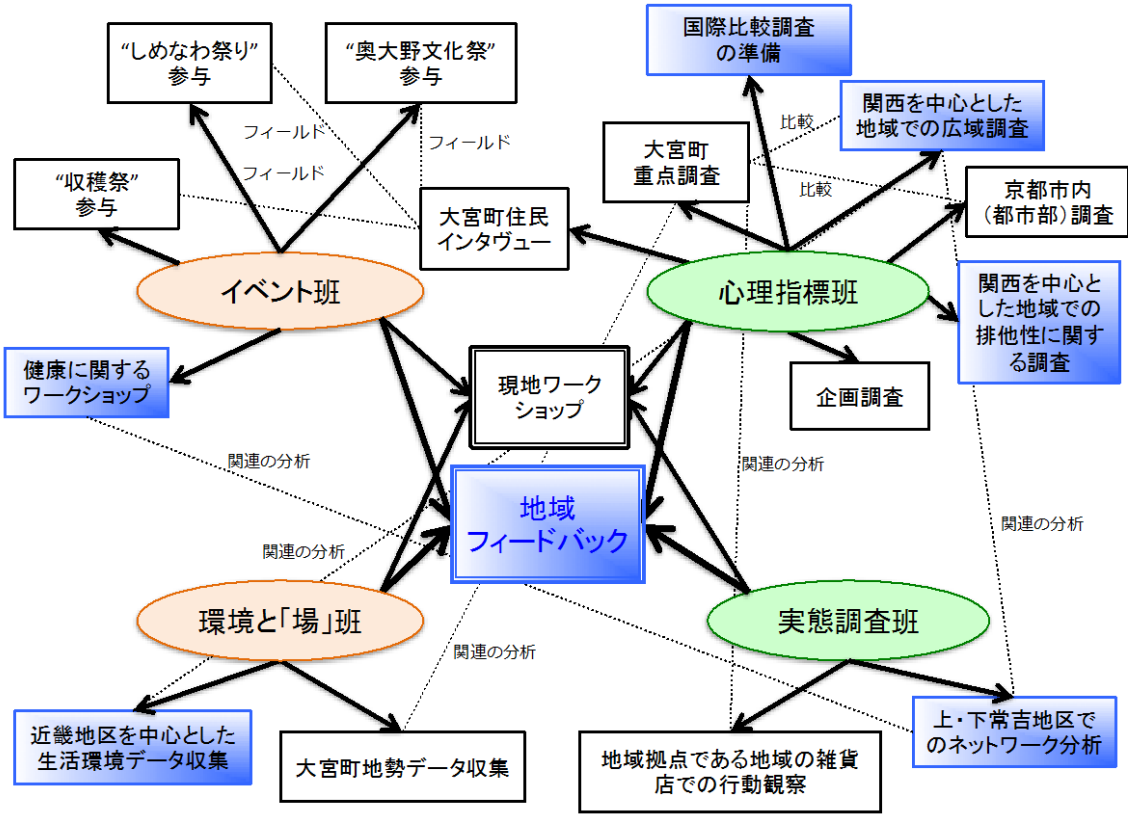


図1．研究開発の全体像（青で実施した研究開発結果を報告）

【平成28年度】

① 地域の幸福についての概念の見直しのため概念整理（4～9 月）
② 地域の幸福の諸側面と関連する変数のストラクチャのモデル提示
③ フィールドとの連携、および重点地域と都市部のリーダーに向けた調査結果の報告会の実施（5～6 月）
④ 重点地域と都市部の一般住民に向けた調査結果のフィードバックの実施（8～10 月）
⑤ 領域マネージメント・グループとの協議により、関西を中心とした地域での排他性に関する調査を実施（10 月）
⑥ 近畿地区を中心とした地域で社会環境データ収集（10 月）
⑦ フィールド現地で IC タグを用いた実態調査のための地区リーダー向け説明会実施（11 月）
⑧ 国際比較調査の準備（1 月～3 月）
⑨ 健康と社会的つながりに関するワークショップの実施（3 月）
⑩ IC タグを用いた実態調査のための地区リーダー向け説明会の第２回目実施（3 月）

（１）実施内容１＜実践活動＞

①地域への調査フィードバック

①-a：京丹後市大宮町における地域リーダーへの報告会...フィールドである京丹後市大宮町にて、京都府京丹後市大宮南地域里力再生協議会に所属する地域リーダーへの報告会を開催した。

①-b：京丹後市大宮町における一般住民への報告書...京丹後市大宮町の一般住民へ調査報告書を配布した。

①-c：京都市南太秦学区リーダーへの報告会...都市部である京都市南太秦学区リーダーへ報告を行い、一般住民へ調査報告書を配布した。

②健康に関するワークショップ

フィールドである京丹後市大宮町にて、特に女性をターゲットとし、身体的・社会的な健康についての実践的ワークショップを開催した。

③インタビュー調査

協力団体であるNPO法人ミラツクと連携し、多世代で維持される地域の持続性について先駆的な取り組みを行っている市にて、地域活性化の取り組みについてフィールド調査（インタビュー）を行った。

・対象地域：滋賀県高島市

④ゴミ集荷と住民のゴミ分別活動に関する調査報告... 地域活動の一つであるごみ収集事業についての分析結果を、京丹後市で活動する協力企業へ報告した。

（２）実施内容２＜地域の開放性に関する社会調査＞

①地域の幸福と開放性-排他性についての質問紙調査

以下の質問紙調査を行った（本報告書では、「本調査」と呼ぶ）。調査で用いた項目は、表1～3のとおりである（報告書内の各分析結果において分析に用いた変数は、以下の表から「ラベル」を再掲する）。また、本報告書の分析には、一部、2016年1月に関西を中心とするエリアで行った調査で収集した小地域との比較を交えている（本報告書では、「事前調査」と呼ぶ）。

a)本調査

・調査時期：2016年10月
・配布配達箇所総数：67,565
　-各配達箇所（世帯）１通
　-配布小地域総数：540
・回収数：6,485
・回収率：9.6%
・有効回答者数：6,452
　-有効小地域（町）数：533
・配布県：14
　-京都、滋賀、三重、和歌山、兵庫、岡山、広島、鳥取、山口、香川、徳島、高知、愛媛、福井

b)事前調査
・調査時期：2016年1月
・配布配達箇所総数：28,867
　-各配達箇所（世帯）１通
　-配布小地域総数：301
・回収数：4,828
・回収率：16.8%
・有効回答者数：4,760
　-有効小地域（町）数：293
・配布県：8県
　-京都、滋賀、和歌山、兵庫、香川、徳島、高知、愛媛

②ICタグを用いた実態調査
　フィールドである京丹後市大宮町において、上・下常吉地区の住民（壮年期～高齢期）を対象に、多世代交流拠点（つねよし百貨店）への来店を匿名で記録する携帯型デバイスを配布し、社会的ネットワークの測定を行った。そして、住民同士の間に存在するネットワーク関係と住民への質問紙調査のデータを用いて、世代の異なる住民のネットワークと地域に対する心理的な態度との関係を分析した。

③生活環境調査
　質問紙調査対象地域の一部である36集落において、各集落15地点を中心に、調査員を派遣し、住民をとりまく生活環境の数量化を行った。これにより、地域の幸福の諸側面が、個人の心理変数以外の生活環境からも影響を受けている可能性を検討した。この調査方法は、H27年度報告書において用いた手法を、より多くの集落に拡張して実施したものである。質問紙調査によって測定された住民の心理変数（例：幸福度）を元とする地域的特徴と、その地域の持つ生活環境の特徴の対応関係について分析を行った。生活環境の数量化に用いた変数は表4のとおりである。
a)対象地域
・本調査対象地域の中から、京都府と福井県から選抜された36集落を対象とした。各集落の代表的な基準点を中心とした周囲の15世帯に対して、訓練された調査員を派遣して生活環境を観察・評定した。

④国際比較調査の準備
　H29年度研究計画として、北米における幸福感と社会関係に関わる質問紙（ウェブ・アンケート）調査を実施する予定である。これを受けて、本調査の内容を中心に、英語版の調査を標準化するべく、翻訳と逆翻訳、および、北米社会人を対象とした予備調査を、インターネットにて実施している。H28年度中は翻訳作業が中心であったため、この内容は本報告書からは割愛する。

表1
本報告書で使用した質問紙調査変数とその定義（質問項目に特に記述が無い限り、各質問への回答は多肢選択「1：全くそう思わない～5：強くそう思う」で行われた）

合成変数ラベル	合成に使用した質問項目
温故知新 (2と3の得点の平均値×1の得点)	1.町内（集落）が過去から受け継いできた伝統を受け継いでいくべきだ 2.伝統に縛られずに、新しい文化をつくるべきだ 3.町外（集落外）から、違った考え方や価値観を取り入れるべきだ
多世代共創	将来生まれてくる世代のために、良い環境や文化を残したい
畏敬	私はよく畏怖[いふ]・畏敬[いけい]の念を覚える 私はよくこの世界の神秘に触れる
尊敬(尊敬現在は1を1点とし,2および3を0点としたダミー変数。尊敬過去は2を1点とし,1および3を0点としたダミー変数。)	町内（集落）に、あなたが尊敬している、または見習うところがあると感じている人はいますか?（1つに○） 1.いる　2.今はいないが過去にいた　3.いない
町内への愛着	私は、この町内（集落）に対して愛着を持っている
町内の開放性	私は、町外（集落外）からやってきた人が町内（集落）に定住することは喜ばしいと思う 私は、外国からやってきた人が町内（集落）に定住することは喜ばしいと思う 町内（集落）の人たちは、よそから来た人がこの町内に定住することを喜ぶだろう 町内（集落）の人たちは、外国から来た人が町内に定住することを喜ぶだろう
移住者への懸念	よそからの移住者が増えると、何かと問題が生じるようになると思う
町内信頼	私は同じ町内（集落）に住む人たちを信頼している 町内（集落）に住む人たちは、基本的に誠実に振る舞う
互酬性の規範	自分がお世話になった町内（集落）の人の頼みを断ってはいけないと思う この町内（集落）には、お互いの役に立つことを求める雰囲気がある 町内（集落）の人にお世話になったら、お返しをするべきだと思う この町内（集落）には、いざという時に助け合う雰囲気がある
上下関係	町内（集落）には、はっきりとした上下関係がある
民主主義	この町内（集落）には、どんな人の意見でも受け入れる雰囲気がある
運命共同体	この町内（集落）の人は、私の人生において切っても切れない関係にある
相互協調性	私は、町内（集落）の人が自分をどう思っているかが気になる 私は、町内（集落）の人と意見が対立することを避ける
相互独立性	私は、自分の考えや行動が町内（集落）の他者と違っていても気にならない 私は、自分がいいと思うのならば、町内（集落）の他の人が自分の 考えを何と思おうと気にしない
文化的タイトネス	この町内（集落）の人々は、たいていの場合、どんな行動がふさわしいか、ふさわしくないか、みんなが同じ意見を持っている この町内（集落）では、誰かが不適切な振る舞いをしたら、他の人々は強く非難するだろう
向社会性（発案・提案）	私は、ささいなことでも、町内（集落）の役に立つことを提案する 私は、町内（集落）を良くするために、今より良いやり方を思いつく

表2
本報告書で使用した質問紙調査変数とその定義（続）

合成変数ラベル	合成に使用した質問項目			
コミュニケーション地域範囲 （0人ならば0点，1人以上ならば1点とし， 4項目の得点を使用）	あなたが普段顔を合わせて話をしたり、話しかけたりする人（同居家族を除く）は、 次の人たちそれぞれで何人くらいいますか？1つずつ選び〇をつけてください。なお、 仕事上の付き合いの人もプライベートな付き合いの人も含めてお答えください。			
	町内（集落）の人	0人	1～5人	6人～
	市内の遠方の町に住む人	0人	1～5人	6人～
	近隣の町（集落）に住む人	0人	1～5人	6人～
	市外に住む人	0人	1～5人	6人～
コミュニケーション世代範囲 （0人ならば0点，1人以上ならば1点とし， 4項目の得点を使用）	町内（集落）の人のうち、あなたが普段顔を合わせて話をしたり、話しかけたりする人 （同居家族を除く）の中で、次の各世代の人は何人くらいいますか？1つずつ選び〇をつけて ください。仕事上の付き合いの人もプライベートな付き合いの人も含めてお答えください。			
	赤ちゃん～園児	0人	1～5人	6人～
	65歳以上の人	0人	1～5人	6人～
	高校生以下の子どもたち	0人	1～5人	6人～
	20～65歳くらいの人	0人	1～5人	6人～
集合活動 （〇をつけていれば1点，なければ0点として， 12項目の平均値をを使用）	あなたの住んでいる町内（集落）における活動のうち、あなたが通常参加しているもの全ての番号に〇をつけて ください。			
	1.自治会	2.地域行事（例:祭りや運動会・文化祭）		
	3.趣味関係の活動	4.自主防災活動		
	5.自主介護活動（例:見守り隊・配食サービス）	6.同年代グループの活動（例:老人会や青年会）		
	7.同性グループの活動（例:婦人会）	8.同業者グループの活動		
	9.地域資源の保全（河川・水路の保全など）	10.冠婚葬祭の手伝い		
	11.ごみの分別活動	12.その他の活動・イベント（自由記述欄）		
実体性	この町内（集落）は、結束力のある集まりだと思う この町内（集落）の人々はお互いに似た性質を持っている			
町内サポート提供	私は、町内（集落）の人が困っていたら手助けをする 私は、必要とされれば、町内（集落）の人の相談に乗る 私は、町内（集落）の人にご馳走したりおすそ分けをしたりする 私は、町内（集落）の人を助けるために、自分の都合を犠牲にする			
町内サポート受領	町内（集落）には、私の心配事や愚痴を聞いてくれる人がいる 町内（集落）には、私に必要なものを貸してくれる人がいる			
危機意識	このままでは、この町内（集落）が将来、現状より悪くなってしまうと思う この町内（集落）は今のままで十分大丈夫だと思う			
促進的貢献	私は、町内（集落）において、役割を果たしたり貢献できたりする、活動的な一員だ			
予防的貢献	私は、町内（集落）において、迷惑をかけたり和を乱したりしない、協調的な一員だ			
モビリティ	私は、この町内（集落）から違うところに引っ越しする可能性がある たとえ現在の町内（集落）に満足していなくても、私はそう簡単にここを離れることはできない			
知り合う機会	この町内（集落）に住む人には、人々と新しく知り合いになる機会がたくさんある			
集団間比較	自分の町内（集落）について考える時に、近隣の町（集落）と比べて考えることがよくある			
近隣信頼	私は近隣の町（集落）に住む人たちを信頼している 私は近隣の町（集落）に住む人たちは、基本的に誠実に振る舞うと思う			
近隣対立	近隣の町（集落）に住む人たちと、仲良くするのは難しい			
近隣へのサポート提供	私は、近隣の町（集落）に住む人が困っていたら手助けをする			
近隣との互酬性	近隣の町（集落）に住む人にお世話になったら、お返しをするべきだと思う			

表3
本報告書で使用した質問紙調査変数とその定義（続）

合成変数ラベル	合成に使用した質問項目
一般的信頼	私は見知らぬ他者であっても信頼する ほとんどの人は、基本的に誠実に振る舞う
一般的サポート提供	私は、見知らぬ人が困っていたら手助けをする
一般的互酬性	町外（集落外）の人にお世話になったら、お返しをするべきだと思う
自尊心	全体的に私は自分自身に満足している 私は他のほとんどの人たちと同じくらいのことが出来る 自分にはいろいろな良い素質があると思う 自分のことを好ましく感じる
協調的幸福感	自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思う 大切な人を幸せにしていると思う
行動賦活系（BAS）	何か欲しいものがあるとき、いつも全力でそれを手に入れようとする 欲しいものが手に入るチャンスに恵まれたら、私はすぐに手に入れようとする
行動抑制系（BIS）	私は、何かミスをしてしまわないかと気になる 何かについて自分の出来が悪かったと思うと悩んでしまう
主体性	何か「できない」ことがあったとしても、私は道を切り開く
好奇心	私は、好奇心が強い
包括的思考	一般に、現在の状況はいつでも変化しうると思う
分析的思考	一般に、現在の状況に基づいて未来の出来事は予測できる
安全祈願	私は、折に触れて、自分や身近な人の安全・無事を祈る
幸福度	現在、あなたはどの程度幸せですか?「とても幸せ」を 10 点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか?いずれかの数字を1つだけ○で囲んでください。 とても不幸　　とても幸せ 0点 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10点
主観的健康感	現在のあなたの健康状態はいかがですか? とても悪い　　とても良い 0点 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10点
町内の人々全般の幸福度	次の人たちは、おおまかに言ってどれくらい幸せだと思いますか? 数字を1つずつ選んでください。ここでは自分の同居家族は除いて考えてください。 町内（集落）の人々全般 とても不幸　　とても幸せ 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
町内の人間関係満足度	次の各文章はあなたの考えにどれくらい当てはまりますか? 全くそう思わない　　強くそう思う 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

表4
本報告書で使用した生活環境調査変数とその定義

生活環境変数	数量化の定義
・建物の新しさ	5段階ー新しいと5 築10年以内に見えたら5、築30年以内に見えたら4、戦後から公道経済成長期の建物なら3、大正から昭和初期なら2、明治以前なら1。
・世帯の敷地の広さ	5段階ー広いと5 ①～70m2(約20坪) ②130m2(約40坪) ③200m2(約60坪) ④260m2(約80坪) ⑤330m2～(100坪)
・家業	農業・商業・漁業・手工業・ただの住宅 農機具や漁網など、目印を見つけたら記載。何も目印がなければ、ただの住宅。
・世帯の敷地内の建物数	母屋・納屋・倉庫・車庫・はなれなどをすべてカウントした総数
・見栄	5段階ー見栄を張っていると5 壮麗な門や華美な鬼瓦や装飾など、高そうな瓦や外壁など。
・母屋の大きさ	5段階ー大きいと5 ①30m2(約10坪) ②70m2(約20坪) ③100m2(約30坪) ④130m2(約40坪) ⑤165m2～(約50坪)
・伝統建築	伝統建築だと5・鉄筋コンクリートは1 タイルやパネル外壁が使われていると下がる
・建物のメンテ	メンテナンスができていると5
・庭の大きさ	大きいと5・庭が無いと1 ①無い ②10m2 ③20m2 ④30m2 ⑤40m2 ⑥50m2～
・庭のメンテ	メンテナンスができていると5
・鉢植えの植物	①無い ②1－3 ②4－6 ③7－9 ④10－12 ⑤13以上
・車	国産乗用車・外車・商用車（1・4ナンバー）・軽自動車・軽トラそれぞれの台数
軽	台数
軽トラ	台数
乗用車	台数
トラック	台数
外車	台数
・飛び出し注意看板	個数
・商業施設	施設数
・公共施設	施設数
・石仏	個数
・標語や張り紙など	個数
・ごみステーション	施設数
・道に落ちているごみ	個数
・崩れかけた廃屋	個数
・落書き	個数

３－４．研究開発結果・成果

（１）明らかになったこと

地域のつながりとして、個人が互いにコミュニケーションを行い、サポート行動を取り合うことが幸福へ繋がる可能性があることが明らかになった（表8参照）。

本調査により、結束型と橋渡し型のソーシャルキャピタルの双方が高いことで高まる地域の開放性は（表15参照）、住民の積極的な向社会的行動を介して、地域の「温故知新」の意識を高める可能性が示唆された（表14参照）。これらの知見を実際にフィードバックした後の変化については、今後の課題としたい。

本調査により、異なる世代との交流は、町内の開放性を説明することが明らかになった（表22参照）。また、時系列データにより、結束型ソーシャルキャピタルは幸福度と主観的健康を高めることが明らかになった（図34参照）。

多世代が関わることで説明される町内の開放性は、決して閉鎖的な意識を生むのではなく、地域内外との関わりと比例関係にあるものである（表12および表13参照）。このような地域で醸成される「温故知新」、すなわち、ふるきをたずねて新しきを知ろうとする意識は、地域の持続性を支える意識である。

総じて、本調査の結果、多世代の共創は地域住民の幸福や健康、および地域の持続性を支えうる可能性が示された。今後は、これらのプロセスに調査の相関以上のプロセス（具体的な交流のパターンやネットワークの様態（図38～41参照）、温故知新によって生み出される社会行動や、そこから維持される自然環境）の測定を行い、それら客観的な指標や、社会の持続可能性に関わる事象（たとえば人口増減）との関係も明らかにしていくことを目指す。

（２）今年度の進捗・成果

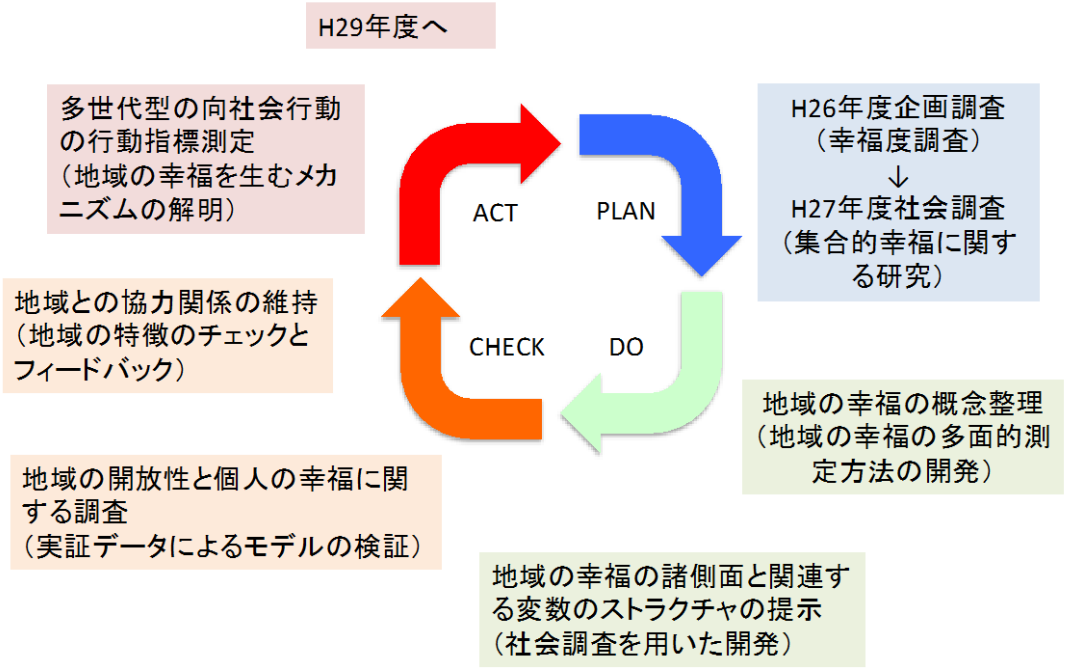


図2. 本報告における各研究開発目標のPDCAサイクル

昨年度までは地域の幸福の測定方法について検討を重ね、その結果、排他的でない、健全な地域の幸福状態を測定するための指標開発をH28年度の研究の主眼とした。この計画に基づき、地域の幸福を多面的に測定し、開放的な地域とそうでない地域の違いと関連する要因を検討するための社会調査を実施した。本報告は、ここで得られた実証的データに基づき、地域の幸福の概念整理を行うと共に、関連する地域の変数（例：ソーシャルキャピタル、愛着など）との実際の関係を記述し、H28年度研究計画にて立てた仮説モデル（後述）を検証した。同時に、これらの実証データを地域住民へ還元することで、協力関係を維持するとともに、指標とそのフィードバックが地域においてどのような有効性を持つのかを検討した。実証データによって示された地域の幸福と地域の開放性、およびソーシャルキャピタルとの関係は、H29年度の研究として、その具体的・行動的なメカニズムを明らかにするための研究へと引き継ぐ。また、指標のフィードバックの有効性については、地域を積極的に統率する担い手を主たるエンドユーザー（受け手）として説明会を実施し、住民一人一人へは会報の形でのフィードバックを実施しているが、地域活動の担い手と住民個人とでは受けとめ方も異なるだろうと考えられるため、今回開発する指標の受け手をどのように設定するのがより効果的であるのかについて、H29年度のプロジェクト内でより詳しく検討したい。

（２－１）地域の幸福の概念整理

①多面的な地域の幸福の諸側面同士の関係

本プロジェクトでは、地域の幸福を多面的に測定し、開放性やソーシャルキャピタルとの関係を実証的に検討していく。

表5
本プロジェクトで扱う多面的な地域の幸福

概念	内容	指標
地域の幸福	幸福感の地域平均	地域住民の幸福感の平均的程度
	幸福感の地域内分散	地域住民の幸福感のちらばりの程度
	自他の幸福の共変関係[1]	地域住民の幸福が時系列的に共変動すること
	自他の幸福の相関関係	地域住民の幸福が個人間で相関すること
	多世代の健康[2]	HPA軸や長期的炎症反応に関するストレス反応

Note. 1) ネットワーク分析により測定.
2)社会調査では「主観的健康感」で測定.

具体的には、町/集落（基幹統計データにおける小地域を指すが、本報告書では、「町」と呼ぶ）を単位とし、調査参加者らに「この町（集落）」についての考え、感じ方や、そこにおける普段の行動について調査を行い、これらの変数と表5に示す地域の幸福との相関関係を検討した。

本プロジェクトにおける地域の幸福は、幸福感の地域平均、地域内分散、自他の幸福の共変関係、自他の幸福の相関関係（以下「自他幸福相関」と呼ぶ）、および、多世代の健康である。幸福感の地域平均は、既存の幸福感の国際比較研究などでよく用いられてきた平均的な幸福度の高さであり、人口増加（Lucas, 2014)、経済的な豊かさ(Diener, 2001)や社会的サポートの受領(Oishi & Schimmack, 2010)と正に相関することが知られている。幸福の地域内分散、すなわち幸福の格差は、経済的格差がもたらす不健康(Wilkinson & Pickett, 2009)と同様の現象が幸福においても見られるかどうかを検討する。自他の幸福の共変関係ならびに相関関係は、住民同士の互恵的な関係に対するシェアド・リアリティの醸成を促進することが仮定されるため測定した。なお、自他の幸福の共変（伝播）関係については、現在フィールドにて測定中のICタグを用いた実態調査によって今後報告する。多世代の健康は、文化が幸福や生きがいについてのシェアド・リアリティを醸成する結果、身体的な健康が向上しているとする近年の健康心理学知見を前提に測定した。なお、多世代の健康については、H28年度までは主観的健康感を用いて測定した。

本プロジェクトの主旨として、幸福感は、それを感じる個人の心理的・行動的なレベルのメカニズムによって生じている部分（例：収入を得ると幸せ）と、その個人が置かれた地域・社会的文脈の特性によって生じている部分（例：犯罪率の低い町に住んでいると幸せ）と、さらに、個人と地域の組み合わせによって生じている部分（例：皆が互いを信頼している地域に住んでいれば、収入が少なくても幸せ）とが存在するという視点に立った

分析を用いた。また、一部の地域で10ヶ月間隔パネル調査デザイン（事前調査と本調査）を用いることで一回の調査では導くことができない町の変化を扱う分析を用いた。

上記を分析の枠組みとし、本調査で得られた地域の多面的な幸福の相関関係を検討した。相関関係が高い変数同士は類似した町の特徴を測定しており、相関関係が低い変数同士は、「多面的」の文字どおり、地域の幸福の異なる側面を測定していることを示していた。

本報告書では、データによる実証的知見を示す節にて用いた「分析」と、分析に使用した「項目」および分析の「結果」を順に呈示し、「結果」の要点を箇条書きにて示す。

●分析：町集約データによる相関分析（町レベル相関）
●項目：幸福度、主観的健康感、町内の人々全般の幸福度
●結果：

表6
本調査における町集約データの相関分析（町レベル相関）の結果

	有効町数	主観的健康感	自他幸福の相関係数	幸福度の分散
幸福度	531	.57 ***	-.12 **	-.05
主観的健康感	531		-.12 *	-.07
自他幸福の相関係数	455			.06
幸福度の分散	531			

Note. †*p*<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

表7
事前調査と本調査の再調査地域における町集約データの相関分析（町レベル相関）の結果

		有効町数（再調査地域）	事前調査			本調査			
			主観的健康感	自他幸福の相関係数	幸福度の分散	幸福度	主観的健康感	自他幸福の相関係数	幸福度の分散
事前調査	幸福度	133	.46 ***	-.29 **	-.37 ***	.10	.08	.15	.05
	主観的健康感	133		-.01	.00	.07	.01	.09	.07
	自他幸福の相関係数	121			.10	.16 †	.10	-.05	-.15 †
	幸福度の分散	133				-.04	-.05	-.08	-.02
本調査	幸福度	131					.54 ***	.10	-.28 **
	主観的健康感	132						.14	-.21 *
	自他幸福の相関係数	113							.12
	幸福度の分散	131							

Note. †*p*<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

- 「幸福度（幸福の平均値）」と「主観的健康感」は互いに正の相関関係にあるので、同じではないが類似の特徴を示していると考えられる（健康度の高い町は幸福度が高い）。
- 事前調査の「自他幸福の相関係数（幸福度と町内の人々全般の幸福度の町ごとの相関係数）」は、本調査の「幸福度」と弱い正の相関関係（統計的には有意傾向）にある。自らの幸福と町内他者の幸福が伴っていると、その後に幸福度が高まる傾向があるのかもしれない。一方で同一調査内では自他の幸福の相関係数は幸福度平均と負の方向で相関する傾向もあるため、解釈には注意が必要である。

☝ 上記以外の幸福関連変数同士は互いに相関が低いため、独立に検討するべき地域の異なる特徴である。

（２－２）地域の幸福の諸側面と関連する変数のストラクチャの提示

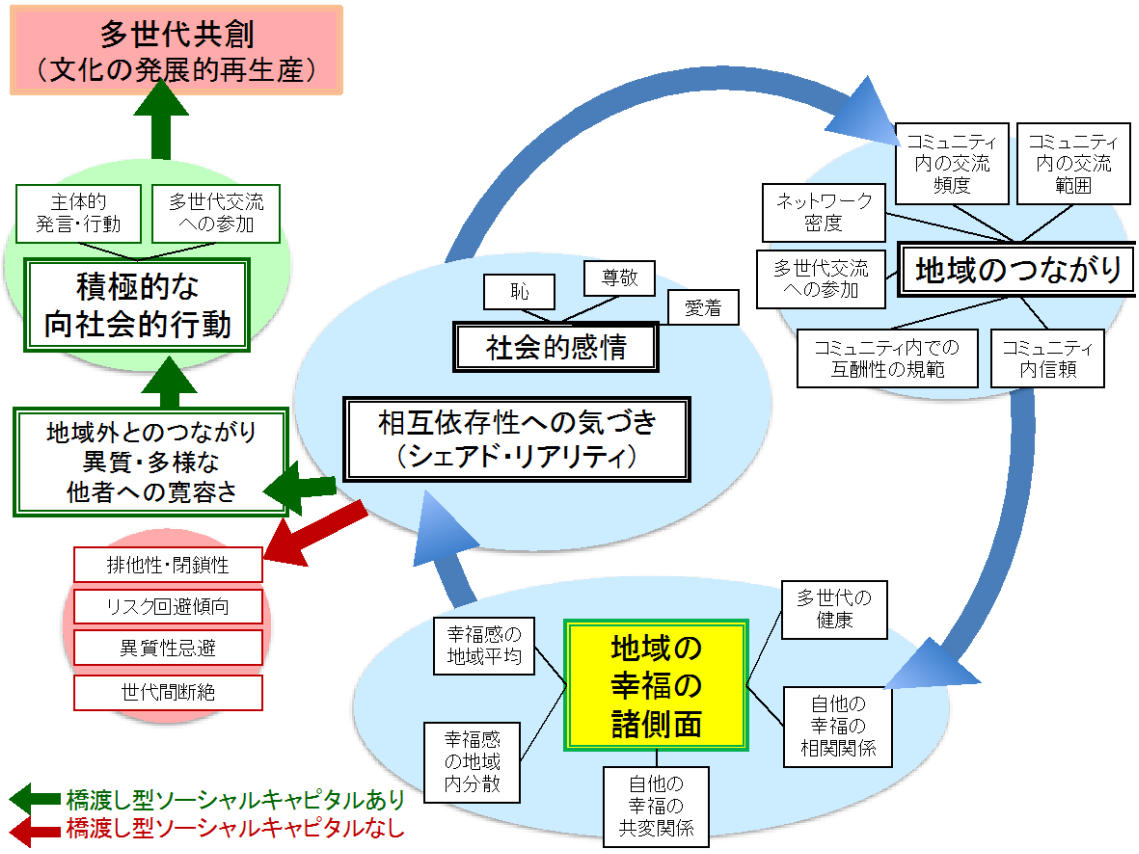


図3.　地域の幸福の諸側面が多世代共創へ至るプロセス

①地域の幸福の諸側面が多世代共創へ至るプロセスモデルの検討

本プロジェクトでは、平成28年度前期に協議を重ねることで概念の整理を行ってきた。その結果、平成28年度研究開発計画書における概念整理として、図3に示すモデルを作成し
た（本報告書では、このモデルを「仮説モデル」と呼ぶ）。このモデルの要点としては、（１）地域の幸福を多面的に測定し、（２）それが地域の排他性ではなく開放性につながるもので、積極的な向社会的行動と関連するとしたことであった。

平成28年度は、ここで議論の鍵となる「地域の開放性」の調査を行った。ゆえに、データにより実証するべきポイントとしては、地域の幸福（例：平均や相関）が地域の開放性-排他性と正の関連を持たず、地域の向社会的行動と正に関連することを示すことであった。

●分析：マルチレベル相関分析（複数の変数の間の相関関係が、個人差のレベルでどのような関係にあって、町/集落差のレベルでどのような関係にあるか分解して検討する分析

法）

●項目：表1～3における変数でモデルに含まれるもの全て

●結果：以下に結果を示す。表中黄色のセルは、続く考察（指マーク箇条書きで解釈する注目部分）に該当するデータを示す。

表8

マルチレベル相関分析（地域のつながりと幸福関連変数）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
地域のつながり											
1 コミュニケーション地域範囲	**.01** *	.34 **	.14 **	.16 **	.10 **	.23 **	.24 **	.15 **	.14 **	.09 **	.10 **
2 コミュニケーション世代範囲	.29	**.03** **	.17 **	.17 **	.10 **	.24 **	.30 **	.20 **	.13 **	.08 **	.11 **
3 町内信頼	.45	.32 +	**.02** **	.49 **	.36 **	.47 **	.41 **	.43 **	.31 **	.21 **	.36 **
4 互酬性の規範	.62 **	.52 **	.76 **	**.06** **	.43 **	.57 **	.52 **	.47 **	.23 **	.14 **	.27 **
5 実体性	.29 +	.30 *	.90 **	1.02 **	**.08** **	.30 **	.26 **	.38 **	.16 **	.11 **	.23 **
6 町内サポート提供	.62 **	.45 **	.66 **	.96 **	.75 **	**.05** **	.56 **	.41 **	.27 **	.18 **	.22 **
7 町内サポート受領	.47 *	.49 **	.75 **	.97 **	.89 **	.90 **	**.08** **	.46 **	.27 **	.17 **	.24 **
8 運命共同体	.38 *	.44 **	.69 **	1.02 **	.87 **	.96 **	.94 **	**.07** **	.19 **	.11 **	.18 **
地域の幸福の諸側面											
9 幸福度	-.25	-.26	.24	-.20	.14	-.22	-.15	-.17	**.01** *	.55 **	.40 **
10 主観的健康感	1.11	.43	-.08	-.16	.09	-.28	-.23	-.75	.75	**.00**	.31 **
11 町内他者幸福	-.45 +	-.18	-.09	-.42 **	-.14	-.47 **	-.28 *	-.41 **	.64 *	.99	**.03** **

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す
注3) 地域の幸福の諸側面については、個人レベルデータが存在する変数のみを用いる

☝ 「地域のつながり」は、主に個人レベルにて、「幸福関連変数」と正の関係にある。具体的には、個人が互いにコミュニケーションを行い、サポートを行うという行動を取ることが個人の幸福と関係を持つ可能性がある。これは、現在実施中の IC タグを用いた実態調査などで、さらに詳細にこの過程や、調査では観察の及ばない相互作用という観点から検討すべきであろう。

表9

マルチレベル相関分析（幸福関連変数と社会的感情）

	1	2	3	4	5	6	7
地域の幸福の諸側面							
1 幸福度	**.01** *	.55 **	.40 **	.10 **	.14 **	-.01	.26 **
2 主観健康	.75	**.00**	.31 **	.06 **	.09 **	-.04 **	.16 **
3 町内他者幸福	.64 *	.99	**.03** **	.06 **	.11 **	.02	.24 **
社会的感情							
4 畏敬	.00	.00	.00	**.00**	.06 **	.06 **	.10 **
5 尊敬現在	.33	.59	.01	.00	**.02** **	-.45 **	.15 **
6 尊敬過去	-.70 *	-.59	-.55 *	.00	.18	**.02** **	.09 **
7 町内への愛着	-.13	-.35	-.34 +	.00	.48 *	.74 **	**.03** **

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す
注3) 地域の幸福の諸側面については、個人レベルデータが存在する変数のみを用いる

☝ 幸福度は個人レベルでは畏敬の念、現在尊敬出来る人がいること、町内への愛着と関連している。一方で町レベルでは、「尊敬できる人」が「過去にいた」のではなく、「現在存在する」傾向が高いことが、町全体の幸福を支えている。

表10
マルチレベル相関分析（社会的感情と地域のつながり）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
社会的感情												
1 畏敬	**.00**	.06 **	.06 **	.10 **	.08 **	.07 **	.10 **	.16 **	.16 **	.22 **	.12 **	.17 **
2 尊敬現在	.00	**.02** **	-.45 **	.15 **	.07 **	.13 **	.20 **	.19 **	.12 **	.16 **	.23 **	.20 **
3 尊敬過去	.00	.18	**.02** **	.09 **	.06 **	.05 **	.03 *	.06 **	.05 **	.07 **	.03 *	.08 **
4 町内への愛着	.00	.48 *	.74 **	**.03** **	.13 **	.15 **	.42 **	.35 **	.24 **	.34 **	.33 **	.41 **
地域のつながり												
5 コミュニケーション地域範囲	.00	.77 **	.13	.39	**.01** *	.34 **	.14 **	.16 **	.10 **	.23 **	.24 **	.15 **
6 コミュニケーション世代範囲	.00	.36 +	.64 **	.43 **	.29	**.03** **	.17 **	.17 **	.10 **	.24 **	.30 **	.20 **
7 町内信頼	.00	.58 *	.46 +	.70 **	.45	.32 +	**.02** **	.49 **	.36 **	.47 **	.41 **	.43 **
8 互酬性の規範	.00	.48 **	.96 **	.85 **	.62 **	.52 **	.76 **	**.06** **	.43 **	.57 **	.52 **	.47 **
9 実体性	.00	.64 **	.62 **	.69 **	.29 +	.30 *	.90 **	1.02 **	**.08** **	.30 **	.26 **	.38 **
10 町内サポート提供	.00	.50 **	.85 **	.81 **	.62 **	.45 **	.66 **	.96 **	.75 **	**.05** **	.56 **	.41 **
11 町内サポート受領	.00	.63 **	.69 **	.69 **	.47 *	.49 **	.75 **	.97 **	.89 **	.90 **	**.08** **	.46 **
12 運命共同体	.00	.53 **	.91 **	.79 **	.38 *	.44 **	.69 **	1.02 **	.87 **	.96 **	.94 **	**.07** **

注1) $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{+}p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す

☝ 「尊敬」や「町内への愛着」といった社会的感情は、個人レベル（＝地域への愛着が高い個人が、地域のつながりを持っているかどうか）よりも、町レベルで（＝地域への愛着が高い町ほど、地域のつながりが他の町より高いかどうか）「地域のつながり」との相関が強い。これらの社会的感情が町レベルで醸成されていることが、つながりのある町の特徴であることが示唆される。

表11
マルチレベル相関分析（幸福関連変数と橋渡し型ソーシャルキャピタル）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地域の幸福の諸側面									
1 幸福度	**.01** *	.55 **	.40 **	.13 **	.12 **	.22 **	.13 **	.16 **	.11 **
2 主観健康	.75	**.00**	.31 **	.10 **	.08 **	.15 **	.09 **	.11 **	.07 **
3 町内他者幸福	.64 *	.99	**.03** **	.12 **	.11 **	.24 **	.12 **	.14 **	.11 **
橋渡し型ソーシャルキャピタル									
4 一般的サポート提供	.71	2.10	-.07	**.01**	.38 **	.31 **	.43 **	.49 **	.30 **
5 一般的互酬性	.23	1.46	-.47	.80	**.01**	.24 **	.24 **	.28 **	.70 **
6 近隣信頼	.25	.95	-.47	1.10	.67	**.00**	.38 **	.51 **	.31 **
7 一般的信頼	.49	2.06	-.06	2.00 *	1.08	.25	**.00**	.29 **	.18 **
8 近隣へのサポート提供	.18	.54	-.20	.36	1.42 *	.39	.55	**.01**	.37 **
9 近隣との互酬性	.08	1.36	-.63 *	.55	1.16 *	.80	.48	1.17 *	**.01** *

注1) $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{+}p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す
注3) 地域の幸福の諸側面については、個人レベルデータが存在する変数のみを用いる

☝ 「幸福関連変数」と橋渡し型ソーシャルキャピタルは、総じて個人レベルでの相関が確認された。つまり、一般的な信頼などが高い個人は、幸福度が高い傾向があった。

表12
マルチレベル相関分析（橋渡し型ソーシャルキャピタルと開放性−閉鎖性）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
橋渡し型ソーシャルキャピタル										
1 一般的サポート提供	**.01**	.38 **	.31 **	.43 **	.49 **	.30 **	-.07 **	.26 **	.17 **	-.14 **
2 一般的互酬性	.80	**.01**	.24 **	.24 **	.28 **	.70 **	.00	.17 **	.15 **	-.10 **
3 近隣信頼	1.10	.67	**.00**	.38 **	.51 **	.31 **	-.09 **	.31 **	.29 **	-.21 **
4 一般的信頼	2.00 *	1.08	.25	**.00**	.29 **	.18 **	-.09 **	.22 **	.21 **	-.11 **
5 近隣へのサポート提供	.36	1.42 *	.39	.55	**.01**	.37 **	-.05 **	.26 **	.21 **	-.16 **
6 近隣との互酬性	.55	1.16 *	.80	.48	1.17 *	**.01** *	.00	.19 **	.15 **	-.09 **
開放性-閉鎖性										
7 移住者への懸念	-.07	.47	.97 *	-.45	.19	.62 *	**.02** **	-.24 **	-.01	.21 **
8 町内の開放性	.24	.11	.79 *	.24	.87 **	.05	-.50 **	**.04** **	.20 **	-.17 **
9 民主主義	-.01	.18	1.60 **	.75	1.05 **	.37	.46 *	.61 **	**.03** **	-.08 **
10 近隣対立	-.96	.30	-1.70 *	-1.40 +	-.98	-.21	.19	-.77 *	-.58	**.01**

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す

- 「橋渡し型ソーシャルキャピタル」、特に「近隣信頼」や「近隣へのサポート提供」は、町レベルで「町内の開放性」と強い正の相関が見られる（個人レベルでも正の相関があるが、町レベルではより強く見られる）。近隣の町との信頼・援助関係がある町ほど、開放的な町といえる。

表13
マルチレベル相関分析（開放性−閉鎖性と積極的な向社会的行動）

	1	2	3	4	5	6
開放性-閉鎖性						
1 移住者への懸念	**.02** **	-.24 **	-.01	.21 **	.01	-.01
2 町内の開放性	-.50 **	**.04** **	.20 **	-.17 **	.18 **	.18 **
3 民主主義	.46 *	.61 **	**.03** **	-.08 **	.25 **	.24 **
4 近隣対立	.19	-.77 *	-.58	**.01**	-.11 **	-.12 **
積極的な向社会的行動						
5 向社会性（発案・提案）	.40 *	.42 **	.75 **	-.36	**.03** **	.49 **
6 促進的貢献	.54 **	.17	.49 **	-.19	.98 **	**.05** **

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す

- 町レベルの「民主主義」は、町レベルの「向社会性」や「促進的貢献」と正の相関にある（個人レベルでもこれらの項目は相関しているが、町レベルではより強く見られる）。

表14
マルチレベル相関分析（積極的な向社会的行動と多世代共創（温故知新および文化の発展的再生産））

	1	2	3	4
積極的な向社会的行動				
1 **向社会性（発案・提案）**	**.03** **	.49 **	.29 **	.22 **
2 **促進的貢献**	.98 **	**.05** **	.24 **	.14 **
多世代共創				
3 **温故知新**	.63 **	.34 *	**.03** **	.38 **
4 **文化の発展的再生産**	-.18	-.26	.50 *	**.02** **

注1) $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{+}p < .10$
注2) 対角行列は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す

- 町レベルの「積極的な向社会的行動」は、町レベルの「温故知新」と正の関係にある（個人レベルでもこれらの相関はあるが、町レベルではより強く見られる）。すなわち、新しい発案や提案に開かれ、役割を担う者が多い特徴を持つ町では、伝統を守りつつも新しい風を町に取り込むという意味での持続性があると考えられる。
- 地域内のつながりから幸福関連変数を介して地域の開放性や多世代共創へ至るプロセスは、個人レベルおよび町レベルの関係によって成立しているマルチレベル現象である（表 8〜表 14 参照）。

②結束型ソーシャルキャピタルおよび橋渡し型ソーシャルキャピタルが開放性に与える交互作用

地域の幸福や適応を考えるにあたって重要な心理社会的変数として、ソーシャルキャピタルがある。ソーシャルキャピタルは「個人間のつながりや社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」と定義され、さらに結束型と橋渡し型の 2 側面に分類されている。結束型ソーシャルキャピタルは地域内の内向きのつながりであり、橋渡し型ソーシャルキャピタルは地域外へ向かう外向きのつながりである。

人々が緊密な結びつきを持っていることのポジティブな側面としては、助け合いや相互扶助を促進し、同じ地域に暮らす人々の幸福を互いに支え合うことが挙げられる。反対にネガティブな側面としては、地域内の結びつきがしがらみや強制力となって、地域外の他者への排他性を強めるといった可能性が指摘されよう。

ソーシャルキャピタルが結束型と橋渡し型のどちらか一方に偏らず、両者がバランスよく保たれていることが、地域の幸福につながる開放性を促進すると考えられる（H28年度研究計画書）。開放性の高い地域には、地域内の誰もが自由に意見を交換できたり、地域外の人が地域内へやって来てさまざまな関わりをもつことに対して開かれているといった特徴があるだろう。

ここでは地域の開放性を従属変数とし、結束型ソーシャルキャピタルおよび橋渡し型ソーシャルキャピタルを独立変数とする重回帰分析を行った。分析の対象は530の地域とした。地域の開放性の指標には、移住者に対して開かれた態度を意味する「町内の開放性」または「民主主義」を用いた。結束型ソーシャルキャピタルの指標には、町内の人々に対する信頼や結束の感覚を意味する「町内への信頼」「実体性」「コミュニケーション地域範囲」「集合活動」を用いた。橋渡し型ソーシャルキャピタルの指標には、町外や世間一般の人々に対する信頼や助け合いの感覚を意味する「一般的信頼」「一般的互酬性」「近隣との互酬性」「一般的サポート提供」「近隣へのサポート提供」を用いた。

●分析：町集約データによる重回帰分析

●項目：町内の開放性、民主主義、町内への信頼、実体性、コミュニケーション地域範囲、集合活動、一般的信頼、一般的互酬性、近隣との互酬性、一般的サポート提供、近隣へのサポート提供
●結果：

表 15
町内の開放性を従属変数とした重回帰分析の結果

独立変数	β	従属変数	R^2
人口密度	-.051	町内の開放性	.132 **
町内への信頼	.298 **		
一般互酬性	.054		
町内への信頼×一般互酬性	.148 **		
人口密度	-.017	町内の開放性	.078 **
実体性	.215 **		
一般互酬性	.076 +		
実体性×一般互酬性	.099 *		
人口密度	-.065	町内の開放性	.033 **
コミュニケーション地域範囲	.067		
近隣との互酬性	.052		
コミュニケーション地域範囲×近隣との互酬性	.130 **		
人口密度	-.042	町内の開放性	.045 **
集合活動	.114 *		
近隣との互酬性	.068		
集合活動×近隣との互酬性	.149 **		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

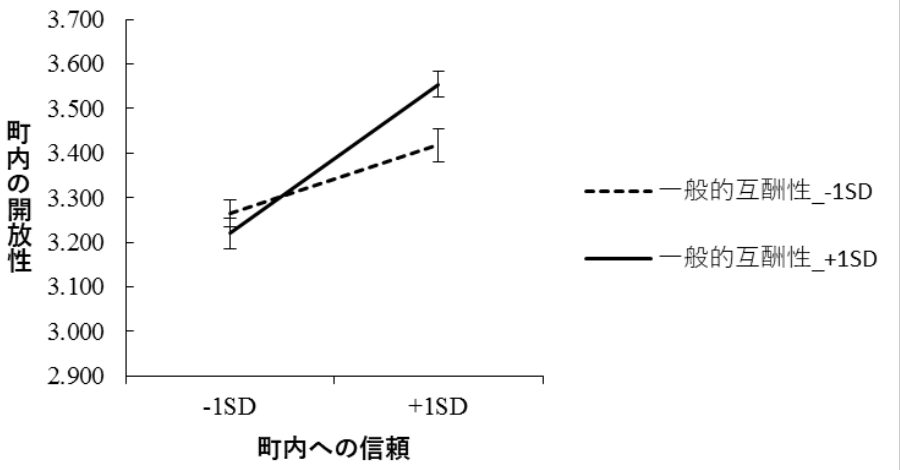


図4.　町内への信頼と一般的互酬性が町内の開放性に及ぼす影響

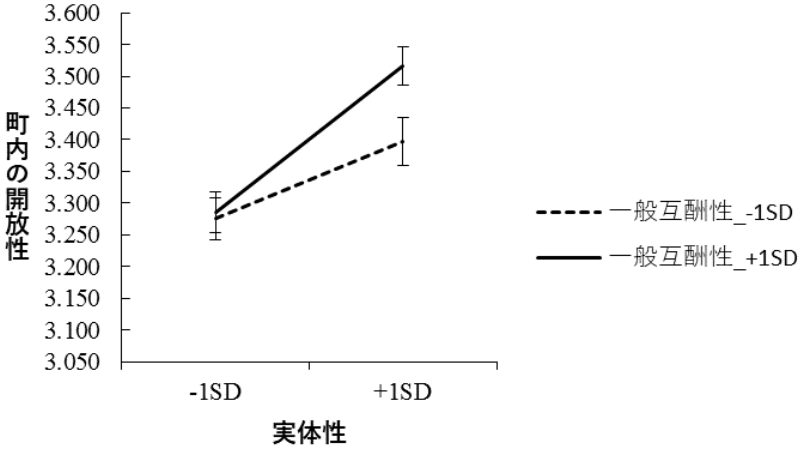


図5. 実体性と一般的互酬性が町内の開放性に及ぼす影響

- 「町内への信頼」や「実体性」が高いほど「町内の開放性」は高いという関係性がみられた。「一般的互酬性」については、単独では「開放性」に影響していなかった。しかし、「一般的互酬性」と「町内への信頼」または「実体性」の両方が高い場合には、とりわけ「開放性」が高い地域であることが、有意な交互作用効果として示されている。
- 自分が暮らす地域の人々に対する信頼や類似性の感覚（結束型ソーシャルキャピタル）をもつ人が多い地域ほど、町外の人や移住者に対する排他的・閉鎖的な態度は弱いと言える。これは直感的に想起されがちな「結束が強く類似性が強いところほど、排他的である」という感覚とは逆の結果であり、非常に意義深いと思われる。
- また、一見開放性につながりそうな、橋渡し型ソーシャルキャピタルの一側面である「一般的互酬性」は、単にそれが高いというだけでは、地域の「開放性」とは無関連であった。しかし、「町内への信頼」または「実体性」と「一般的互酬性」（つまり結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタル）が組み合わされることによって、排他的・閉鎖的ではない開かれた地域の特徴がよりいっそう促進されている可能性が示された。
- 「コミュニケーション地域範囲」ならびに「近隣との互酬性」は、どちらも単独では「町内の開放性」に対して有意な影響を及ぼしていなかった。

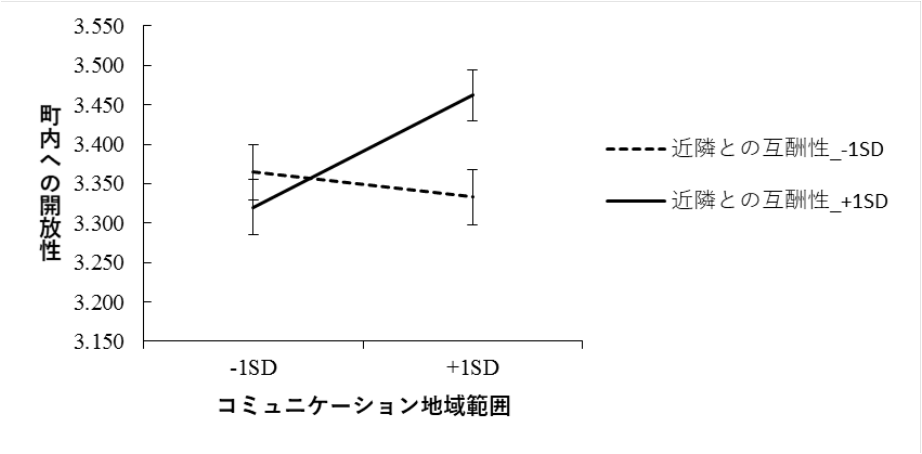


図6. コミュニケーション地域範囲と近隣との互酬性が町内の開放性に及ぼす影響

- しかし、「コミュニケーション地域範囲」と「近隣との互酬性」がともに高い場合にはじめて、「町内の開放性」が高いという有意な交互作用が確認された。この結果は、結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルのどちらか一方だけに注目していたのでは不十分であり、両者がバランスよく高い状態であることこそが、地域の開放性というポジティブな特徴を生み出すことを示唆している。

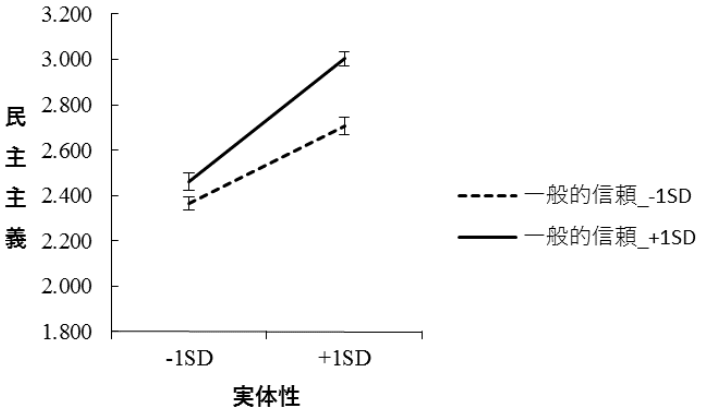


図7. 実体性と一般的信頼が民主主義に及ぼす影響

- 結束型ソーシャルキャピタルの一側面である「実体性」の高さ、つまり地域内の結束力の高さは、誰でも自由に意見を発することができる雰囲気を意味する「民主主義」に対して強い正の影響をもつ。これは「つながりが強いところほど異論を許さない」という一見ありがちな仮説に対して、結束型ソーシャルキャピタルが、地域内において異を唱えさせない強制力や相互監視のような、ネガティブな結びつきの要因にはなっていないことを表している。

表 16
民主主義を従属変数とした重回帰分析の結果

独立変数	β	従属変数	R^2
人口密度	.021	民主主義	.306 **
実体性	.454 **		
一般的信頼	.203 **		
実体性×一般的信頼	.168 **		
人口密度	.014	民主主義	.288 **
実体性	.451 **		
一般的サポート提供	.090 *		
実体性×一般的サポート提供	.202 **		
人口密度	.023	民主主義	.298 **
実体性	.435 **		
近隣へのサポート提供	.182 **		
実体性×近隣へのサポート提供	.142 **		

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

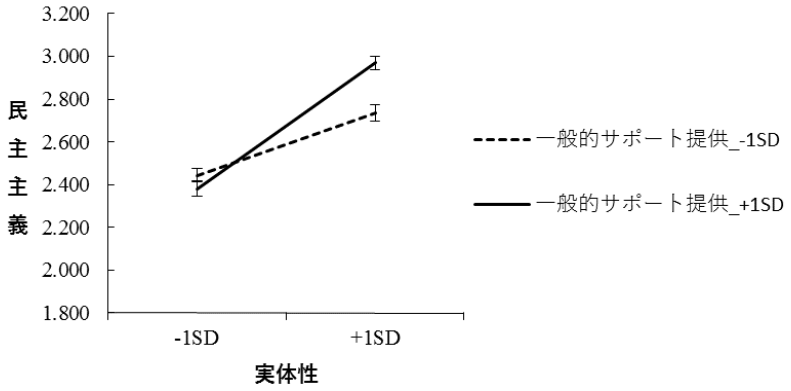


図8. 実体性と一般的サポート提供が民主主義に及ぼす影響

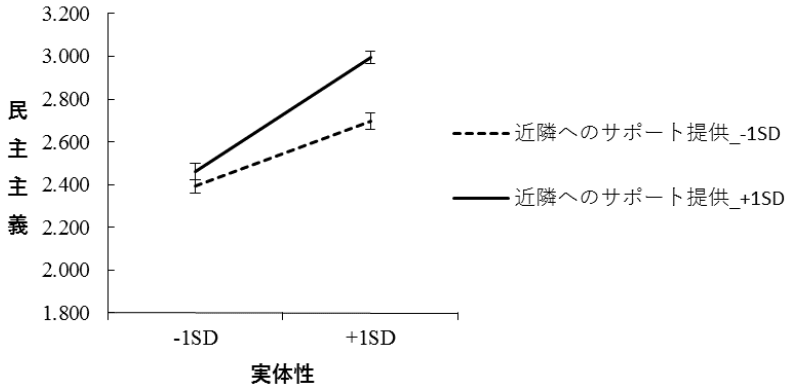


図9. 実体性と近隣へのサポート提供が民主主義に及ぼす影響

- 「一般的信頼」「一般的サポート提供」「近隣へのサポート提供」はいずれも、町内の外側にいるさまざまな他者に対するポジティブな姿勢を意味している。これらの変数と「実体性」の交互作用効果が、「民主主義」に対して有意な正の影響をもつことから、結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルの組み合わせの効果の重要性が、3 つの異なる橋渡し型ソーシャルキャピタルをあらわす変数を通して一貫して確認された。
- 結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルの多様な側面のうち大部分は、それ単独でも、地域の開放性や「民主主義」といった、排他性・閉鎖性とは反対の特徴とポジティブな関連がみられた。それだけでなく、結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルの両者がそろってはじめて生じる交互作用効果も確認された。これらの結果より、多世代共創を形作っていく開放的で向社会的な地域の特徴というものが、結束型ソーシャルキャピタルと橋渡し型ソーシャルキャピタルの両側面のバランスよい伸展によって、効率的に達成されるものであるという見通しが得られたといえるだろう。

③質問紙調査指標と生活環境変数との相関

モデルは主に心理指標で構成されているが、それら心理的変数は社会構造の関数であると捉える見方がある。そこで、住民の生活環境を測定し、それらとモデル変数との関係を、町集約データを利用して検討した。

●分析：町集約データによる相関分析

●項目：表1～4における変数でモデルに含まれる変数と生活環境変数、および、統制変数として基幹統計より人口密度を別途使用

●結果：以下に結果を示す。原則的に表中の数値はPearsonの積率相関係数であるが、生活環境変数のうち得点が0または1の二値しかとらなかった生活環境変数については、Spearmanの順位相関係数による結果を赤字で併記した。また、表中黄色のセルは、続く考察（指マーク箇条書きで解釈する注目部分）に該当するデータを示す。

表17
生活環境変数とモデル変数の相関関係

	多世代共創			幸福関連変数			地域のつながり（結束型ソーシャルキャピタル）				橋渡し型ソーシャルキャピタル				排他性・閉鎖性
	文化の発展的再生産	温故知新	促進的貢献	幸福度	町内の他者の幸福度	自他幸福の回帰係数	集合活動への参加	町内信頼	実体性	運命共同体	近隣信頼	近隣へのサポート提供	近隣との互酬性	一般互酬性	移住者への懸念
家業															
住宅	.14	.25	-.30 †	-.28	-.14	-.08	-.39 *	-.13	-.18	.00	.07	-.11	-.13	-.04	-.09
商業	-.10	-.25	-.13	-.04	-.12	-.17	-.29 †	-.01	-.14	-.06	-.08	-.05	-.08	-.05	.05
農業	-.05	-.10	.35 *	.32 †	.23	.17	.57 ***	.11	.25	.06	-.02	.14	.18	.09	.06
漁業	-.03	-.07	-.10	-.22	-.22	-.01	-.25	.04	-.16	-.08	.01	.02	-.24	-.20	.09
	.11	-.01	-.29 †	-.20	-.11	.13	-.22	.15	-.14	-.10	-.03	.03	-.25	-.24	-.01
道端変数															
鉢植えの植物	.38 *	-.13	-.06	.18	.24	.13	-.08	.20	.25	.45 **	.05	-.08	-.27	-.15	-.29 †
飛び出し注意看板	-.35 *	.00	-.28	-.19	-.08	-.38 *	-.17	-.40 *	-.34 *	-.34 *	-.45 **	-.34 *	-.08	.09	.33 †
	-.23	-.13	-.16	-.15	-.18	-.13	-.26	-.30 †	-.33 †	-.19	-.23	-.25	-.05	.17	.15
ごみステーション	-.36 *	.03	.00	.05	-.31	.03	.03	.07	-.16	-.22	-.25	-.02	.10	.04	.41 *
	-.13	-.02	-.05	.09	-.19	.20	-.12	.15	-.25	-.10	-.23	-.02	.04	.00	.27
伝統建築	.11	-.13	-.13	-.27	-.21	-.14	-.30 †	-.28	-.35 *	.05	-.08	-.30 †	-.06	.07	-.09
石仏	.27	.08	-.14	.00	.09	-.10	.15	-.22	-.11	-.24	-.21	-.11	-.39 *	-.48 **	-.19
	.18	-.01	-.35 *	-.06	.01	-.28	.15	-.32 †	-.16	-.27	-.31 †	-.10	-.36 *	-.36 *	-.14

- 普通の住宅が多い地域は、「集合活動」への参加が少なく、「促進的貢献」も低い。農家の多い地域は、「集合活動」への参加が多く、「促進的貢献」が高い。農業の盛んな地域では、貢献を伴う集合活動が保たれているのかもしれない。
- 「鉢植えの植物」の多さは、その土地に根を下ろして長く安定して住むことを反映しているのか、それが多いほど「運命共同体」の感覚を持ち「文化の発展的再生産」の気持ちも強い。
- 「伝統建築」が多いほど「実体性」が低い、すなわち地域のまとまりを感じていない。また、「集合活動」にも参加しておらず、「近隣へのサポート提供」も低い。
- 「石仏」の多い地域は町内外の他者にお世話になった時にお返しをしなくてはという気持ち（「近隣との互酬性」や「一般互酬性」）が弱い。
- 「飛び出し注意看板」が多い地域は、結束型ソーシャルキャピタルが低い。交通事故が多いことや道路へ飛び出すこと、もしくは、それらに注意した取り組みが必要な地域は、地域内のつながり・信頼が低いのかもしれない。

表 18
生活環境変数とモデル変数の相関関係（続）

	多世代共創			幸福関連変数			地域のつながり（結束型ソーシャルキャピタル）				橋渡し型ソーシャルキャピタル				排他性・閉鎖性
	文化の発展的再生産	温故知新	促進的貢献	幸福度	町内の他者の幸福度	自他幸福の回帰係数	集合活動への参加	町内信頼	実体性	運命共同体	近隣信頼	近隣へのサポート提供	近隣との互酬性	一般互酬性	移住者への懸念
統制変数: 人口密度															
建物の新しさ	-.13	-.01	.24	.30 †	.07	.25	.47 **	.19	.32 †	-.05	.20	.30 †	.10	.02	.09
世帯の敷地の広さ	.00	-.09	.26	.16	.37 *	.05	.60 ***	.01	.15	.14	.10	.20	.23	.29 †	-.09
世帯の敷地内の建物数	.03	-.01	.28	.20	.35 *	-.03	.64 ***	.01	.25	.19	.06	.06	.17	.21	-.03
母屋の大きさ	.26	-.13	.22	-.01	.35 *	-.08	.23	-.01	.07	.27	.14	.19	.01	.18	-.40 *
建物のメンテ	.17	-.06	.29 †	.50 **	.24	.39 *	.24	.24	.20	.02	.12	.28	.11	-.02	-.31 †
庭の大きさ	-.16	.01	.10	.18	.40 *	.04	.67 ***	-.06	.16	-.01	.11	.12	.25	.16	.04
庭のメンテ	.32 †	-.29 †	-.01	.35 *	.54 *	.05	.49 **	-.21	.08	.06	.00	.00	-.23	-.17	-.33 †
統制変数: 人口密度, 家業_農業															
建物の新しさ	-.08	.11	.19	.20	-.02	.20	.32	.22	.30	-.11	.23	.36 *	.04	-.02	.04
世帯の敷地の広さ	.04	-.07	.11	-.03	.29	-.06	.46 **	-.12	-.01	.10	.08	.10	.12	.26	-.12
世帯の敷地内の建物数	.07	.05	.02	.01	.28	-.17	.49 **	-.11	.12	.19	.08	-.10	.05	.19	-.05
母屋の大きさ	.25	-.25	.05	-.13	.30	-.15	.16	-.16	-.08	.28	.09	.02	-.15	.09	-.37
建物のメンテ	.09	-.22	-.02	.43 *	.16	.36	.08	.10	.01	.05	.20	.13	-.01	-.12	-.25
庭の大きさ	-.11	.17	-.03	-.02	.34	-.07	.53 **	-.14	.05	-.10	.11	.09	.20	.14	-.04
庭のメンテ	.38 *	-.30	-.07	.30	.51 **	.01	.44 *	-.25	.04	.05	.04	-.01	-.28	-.20	-.43 *

- 「幸福度」の高い地域では、建物が新しく、建物や庭のメンテナンスが行き届いているなど、経済的な豊かさと関連しそうである。
- 町内の他者の「幸福度」の高さは、「世帯の敷地の広さ」・「世帯の敷地内の建物数」・「母屋の大きさ」・「庭の大きさ」・「庭のメンテ」の変数と正の相関関係にある。人が町内の他者の幸福を推し量るとき、敷地や庭の大きさ・建物の数や大きさなどの経済的な条件を基準にしているところもあるのかもしれない。
- 「移住者への懸念」が高い地域は母屋が小さく建物や庭のメンテナンスが行き届いていない。
- 不動産的変数のほとんどが、「集合活動への参加」と正の相関がある。「家業が農業であること」を統制変数としてもなお、世帯や庭の広さが「集合活動」と関連することから、土地に余裕があるほど「集合活動」を気軽に頻繁に行ないやすい可能性もある。

表19
生活環境変数とモデル変数の相関関係（続）

	多世代共創			幸福関連変数			地域のつながり（結束型ソーシャルキャピタル）				橋渡し型ソーシャルキャピタル				排他性・閉鎖性
	文化の発展的再生産	温故知新	促進的貢献	幸福度	町内の他者の幸福度	自他幸福の回帰係数	集合活動への参加	町内信頼	実体性	運命共同体	近隣信頼	近隣へのサポート提供	近隣との互酬性	一般互酬性	移住者への懸念
統制変数: 人口密度															
車の台数	.13	-.14	.40 *	.47 **	.40 *	.14	.43 *	.20	.25	.29 †	-.09	.11	.19	.30 †	-.24
軽	.00	-.11	.10	.47 **	.29	.03	.49 **	.10	.16	.04	-.23	.00	.31 †	.31 †	.02
軽トラ	.09	.09	.45 **	.22	.12	.12	.08	.34 *	.32 †	.41 *	.16	.26	.05	.07	-.21
乗用車	.05	-.10	.38 *	.28	.34	.04	.38 *	.15	.23	.23	-.01	.07	.18	.23	-.20
トラック	.31 †	-.25	-.05	.04	.15	-.01	.09	-.22	-.18	-.09	-.16	.00	-.34 *	-.11	-.19
外車	.02	-.32 †	-.08	-.17	-.04	.22	-.26	-.06	-.27	.00	-.05	-.10	-.12	-.12	-.04
統制変数: 人口密度, 車の台数															
軽	-.12	.00	.14	.27	.06	-.06	.28	.03	.03	-.14	-.14	.01	.37 *	.31	.15
軽トラ	.07	.27	.11	-.05	-.13	.05	-.17	.30	.25	.25	.12	.21	-.16	-.24	-.08
乗用車	-.12	-.02	-.08	-.17	.04	-.12	.11	-.07	.03	.00	.08	-.11	.01	-.04	.04
トラック	.31	-.28	-.13	-.04	.08	-.03	-.01	-.28	-.25	-.14	-.12	.00	-.40 *	-.17	-.19
外車	.01	-.38 *	.02	-.18	-.04	.23	-.31	-.07	-.30	.02	-.01	-.10	-.11	-.11	-.06
	-.12	-.27	-.01	-.17	-.08	.22	-.29 †	-.16	-.27	-.02	-.09	-.17	-.14	-.13	.06
統制変数: 人口密度, 軽, 軽トラ, 乗用車, トラック, 外車															
車の台数	.07	-.06	-.11	.05	.03	.28	-.35 †	-.06	-.17	.10	.04	-.09	-.07	.11	-.11

- 「車の台数」を統制変数に加えて偏相関を算出すると、「近隣との互酬性」と「軽」が正の相関、「トラック」が負の相関となる。狭い道でも行き来しやすい「軽」自動車の多い地域は、日常生活の隅々まで、車を使って様々なやりとりをしたり、 持ちつ持たれつの関わりが多かったりするのかもしれない。「トラック」の多い地域には、運送業従事者が多いと考えられる。この生業のため、居住地域や近隣の町の人々と直接関わる機会が少ないのであれば「近隣との互酬性」が低いのかもしれない。
- 反対に、全車種を統制変数に加えると、「車の台数」は他変数と顕著な相関関係はみられない。したがって、車種を無視した「車の台数」そのものは、地域の特徴とはあまり関係はない。

（３）地域との協力関係の維持

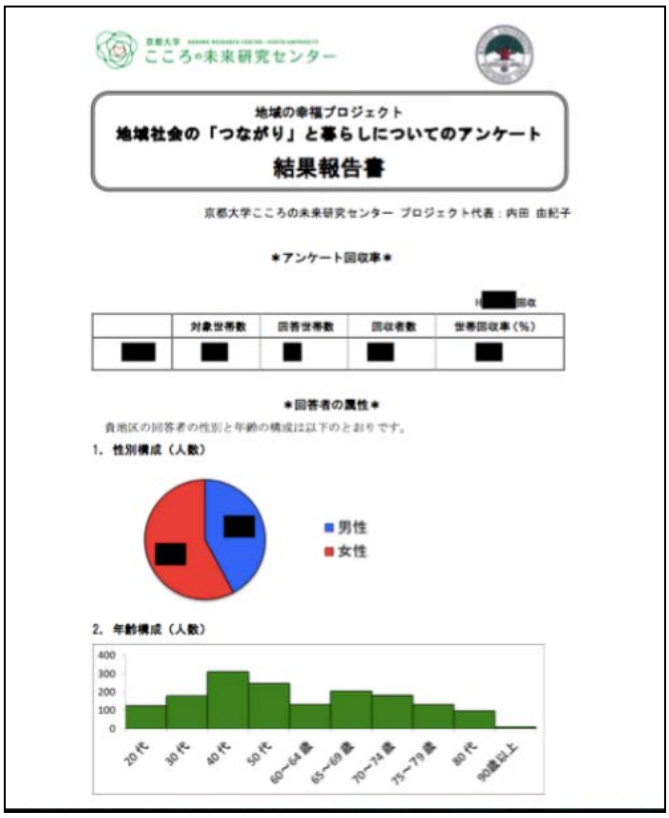
本プロジェクトにて実施した社会調査の結果を、地域のリーダーおよび一般住民、協力企業、協力者らを参加対象に、報告書を交えた調査報告会を開催し、地域の幸福に関するフィードバックを行った。対象別に以下a～cの地域へのフィードバックを行った。

a：京丹後市大宮町における地域リーダーへの報告会

本プロジェクトのフィールドである京丹後市大宮町において、平成27年度に行った社会調査の分析結果を、京都府京丹後市大宮南地域里力再生協議会の地域リーダー（自治体区長・副区長ら）を招いて報告した。（報告会の様子は図10、ウェブサイト掲載は割愛）

報告会では、京都府京丹後市大宮南地域里力再生協議会（奥大野、上常吉、下常吉、三坂、谷内）ごとに、「幸福・健康」、「地域の幸福のあり方」、「地域に対する気持ち」、「自然・文化の保護」、「地区内外の交流」について、３種類の異なる年齢層（39歳以下、40～59歳、および、60歳以上）の全体的特徴について地域ごとのデータを掲載した。各リーダーに対して自地域の報告書を提出した（例は図11）。

地域リーダーらは、自地域の特徴を、他の地域との競争的比較に基づいて理解するのではなく、地域内の複数世代の特徴（例：若齢、中齢、高齢それぞれの幸福度平均など）に基づいて理解することで、多面的な幸福の横断発達的特徴についてフィードバックを受けた。地域リーダーらの反応は良好で、一部の地域からは自地域の示した特徴の要因についての質問が挙がり、今後の地域活動の参考にする旨を確認した。


こころの未来研究センター

地域の幸福プロジェクト
地域社会の「つながり」と暮らしについてのアンケート
結果報告書

京都大学こころの未来研究センター プロジェクト代表：内田 由紀子

＊アンケート回収率＊

	対象世帯数	回答世帯数	回収者数	世帯回収率（%）
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]

＊回答者の属性＊

貴地区の回答者の性別と年齢の構成は以下のとおりです。

1．性別構成（人数）

2．年齢構成（人数）

図11．京都府京丹後市大宮南地域里力再生協議会の地域リーダーへ配布した地域ごとの報告書の例（地域固有の情報は割愛）．

b：京丹後市大宮町における一般住民への報告書

本プロジェクトのフィールドである京丹後市大宮町において、平成27年度に行った質問紙調査より、地域活動の拠点の一つと考えられるごみ収集事業（分別活動など）についての分析結果を報告した。

上述の自治体リーダーらとは異なり、一般住民へのフィードバックには、わかりやすさを高め、要点を明確にした情報掲載が重要と考えられたため、配布物の作成には、制作会社のメンバーと共に重ねての検討を行った（図12・図13「住民へのフィードバックに配布したビラの例」はウェブサイト掲載は割愛）。

c：京都市南太秦学区リーダーへの報告会

本プロジェクトの都市部のフィールドである南太秦学区において、平成27年度に行った質問紙調査についての分析結果を、南太秦学区の地域リーダーに対して報告を行った。

南太秦学区では、長年高齢の自治会員が小学生の登下校を見守ったり、多世代から成る地域住民の交流の場として小学校を使ったカフェを開催したりするなどしており、地域を挙げて、次の世代を育てていく姿勢が感じられた。また、高齢層は居住年数が長く、「向こう3軒両隣り」の互助の意識が高いことも感想として挙げられた。町外の人と話す機会は、特に小学校区の人が集まる場などで担保されると考えられた。

②健康に関するワークショップ

イベント班の地域的取り組みの一貫として、本プロジェクトのフィールドである京丹後市大宮町において健康に関するワークショップを開催した。参加者は主に地域の女性(参加者は６０～７０代の女性)であり、主に男性で構成される地区リーダーらとは異なる性別層にアプローチすると共に、認知症予防と健康的な高齢生活（健全な食生活、および、「虚弱＝フレイル」の悪循環を防ぐ生活）のためのレクチャー、健康増進の体操（様々な曲調の音楽を用いて基本的なストレッチ、リズムに合わせた全身運動）、および、地域の幸福に関した「社会的な不健康」に関する知識提供を行った。

図14.　健康に関するワークショップ開催のお知らせ.

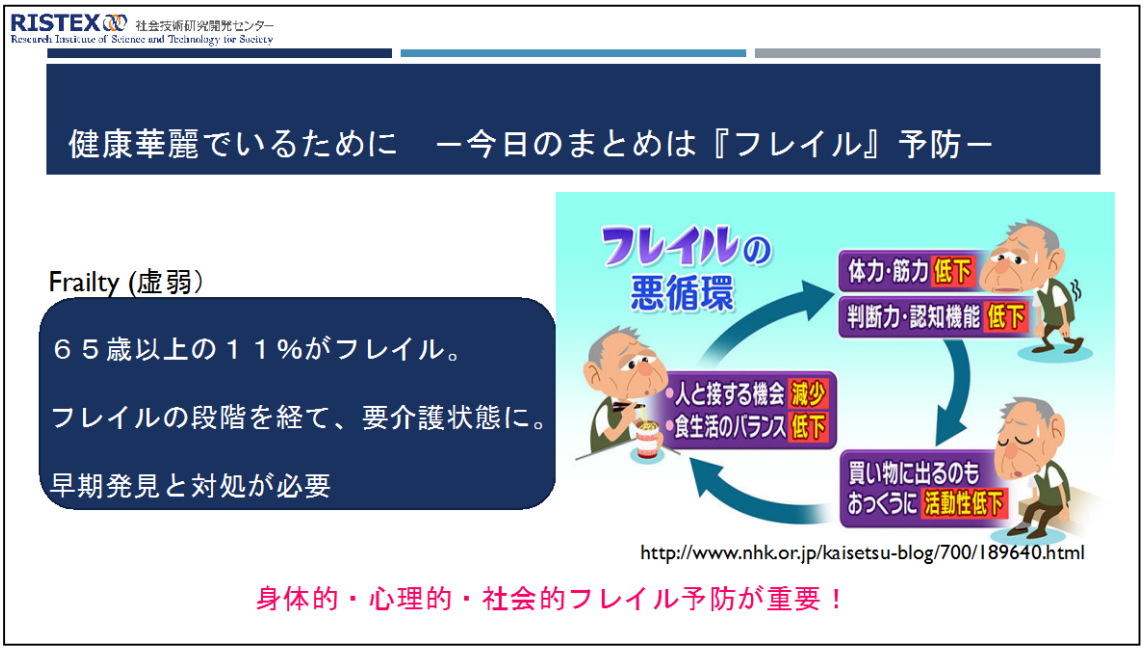


図15.　健康に関するワークショップにおける、レクチャーの内容の例.

図16. 健康に関するワークショップの様子（京丹後市大宮町奥大野公民館）：ウェブ掲載は割愛

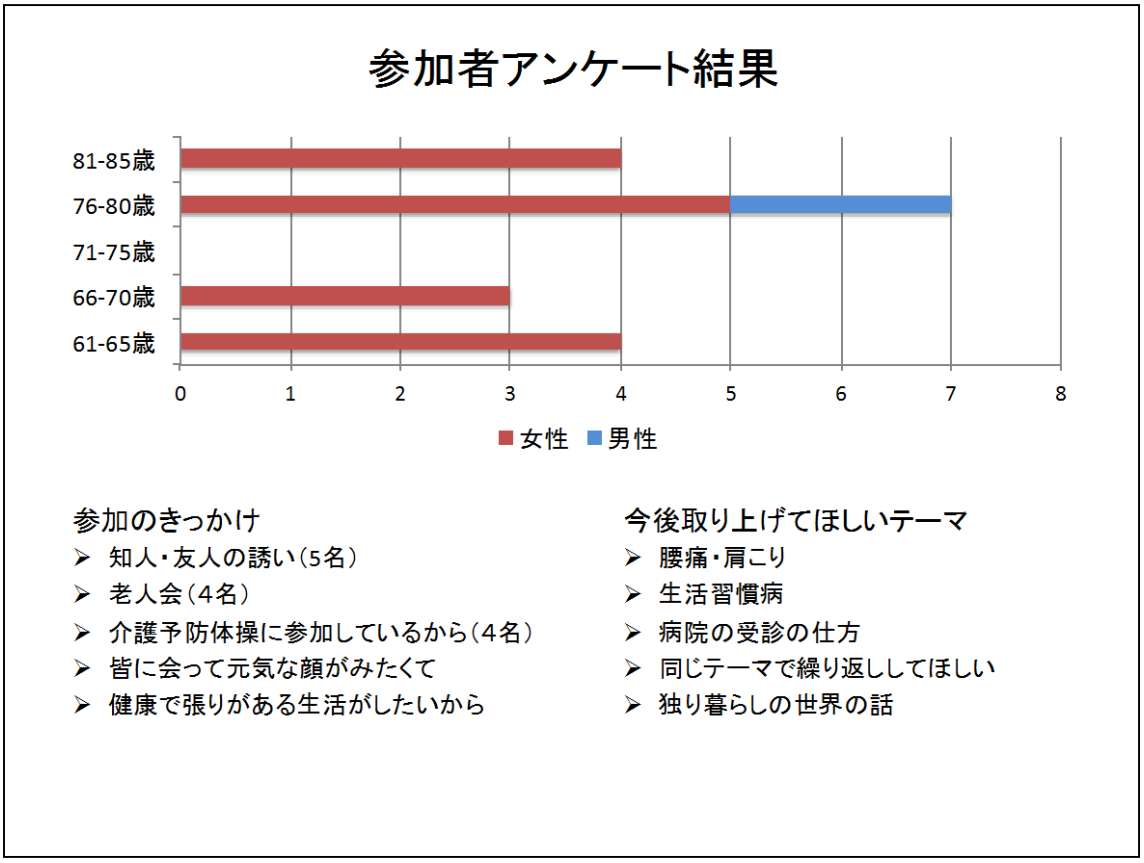


図17. 健康ワークショップ参加者に対するアンケート結果.

- 参加者の参加へのきっかけは、友人や老人会など、インフォーマルな会であった。集合活動自体のインフォーマルさのみならず、そこへ人々を導く方法にも「気軽な」文脈設定が必要なのかもしれない。
- 身体的な不健康に関する知識提供のみならず、社会的な交流も期待されていることが明らかになった。

③インタビュー調査

協力団体であるNPO法人ミラツクと連携し、多世代で維持される地域の持続性について先駆的な取り組みを行っている市にて、地域活性化の取り組みについてフィールド調査（インタビュー）を行った。

結果、Iターン者などが根付く地域づくりのためには、地域の居住環境について丁寧にフォローしていくこと、地域のルール（暗黙になりがちな）について移住前に明示的に提示し、移住後にもサポートを続けていくこと、コミュニティの中ではあるけれども、やや周辺的な部分の活動からの参加を促し、移住者がもつスキルなどで地域に貢献できる仕組み作りを行うことの重要性などが整理された。

④ゴミ集荷と住民のゴミ分別活動に関する調査報告

地域活動の拠点の一つと考えられるごみ収集事業（分別活動など）についての分析結果を、京丹後市を中心に活動する協力企業へ報告した。主な知見は以下の通りである。

地域コミュニティでは様々な地域活動が行われている。ここでは、ごみ分別活動が盛んな地域では他にどのような地域活動が盛んであるかを調べた。具体的には、表20の12種類の地域活動に対して因子分析（地域単位）を行うことで、活動間の相互関係を確認した。

●分析：因子分析、相関分析
●項目：集合活動
●結果：

表20
集合活動の因子分析結果

	因子		
	1	2	3
自治会	.598	-.056	-.080
地域行事	.410	.121	.056
自主防災活動	.349	.021	.201
趣味関係の活動	.073	.493	-.127
同性グループの活動	-.149	.438	.126
同年代グループの活動	.123	.394	-.016
自主介護活動	.007	.272	.153
冠婚葬祭の手伝い	.007	.012	.533
地域資源の保全	.199	-.104	.410
ごみの分別活動	-.045	.058	.356
その他の活動・イベント	-.084	.140	.163
同業者グループの活動	.029	.132	.145

注）因子の抽出には最尤法を用い、斜交（プロマックス）回転を行った。

- 住民のごみ分別活動が盛んな地域では、冠婚葬祭の手伝いや地域資源の保全も盛んに行われやすいことが確認された。
- 冠婚葬祭の手伝いや地域資源の保全は「互酬的な活動」だと考えることができ、住民のごみ分別活動も同様の性質を持っていることがうかがわれる。

a) 地域における住民のごみ分別活動を促進する要因について

１）決まりごと

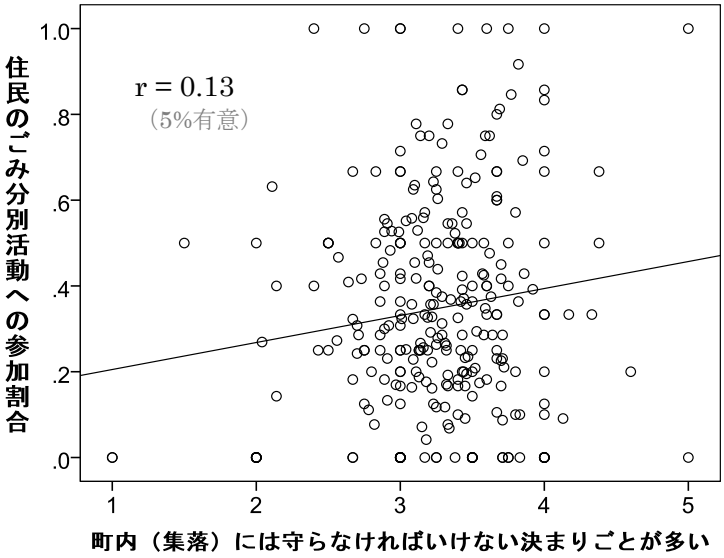


図 18.　2 変数の散布図

- 守らなければいけない決まりごとが多い地域ほど、住民のごみの分別活動への参加割合が大きい。

２）決まりごとの順守

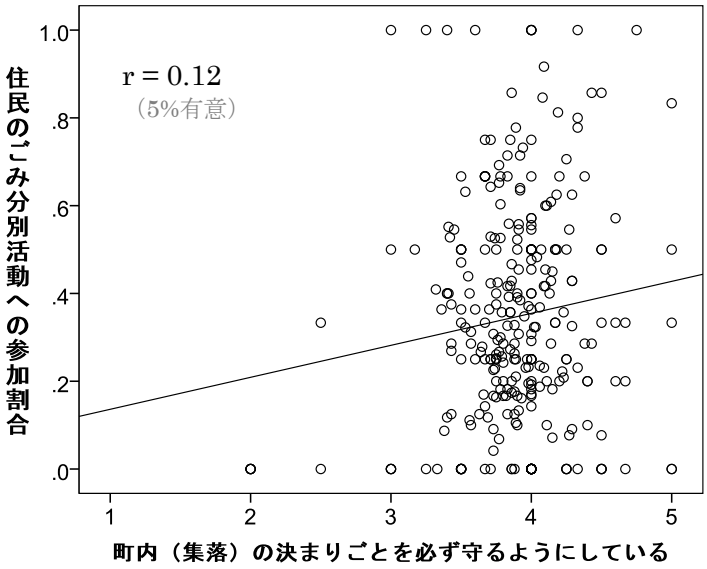


図19.　2変数の散布図

- 町内（集落）の決まりごとを守る住民が多い地域ほど、住民のごみの分別活動への参加割合が大きい。

３）互酬性

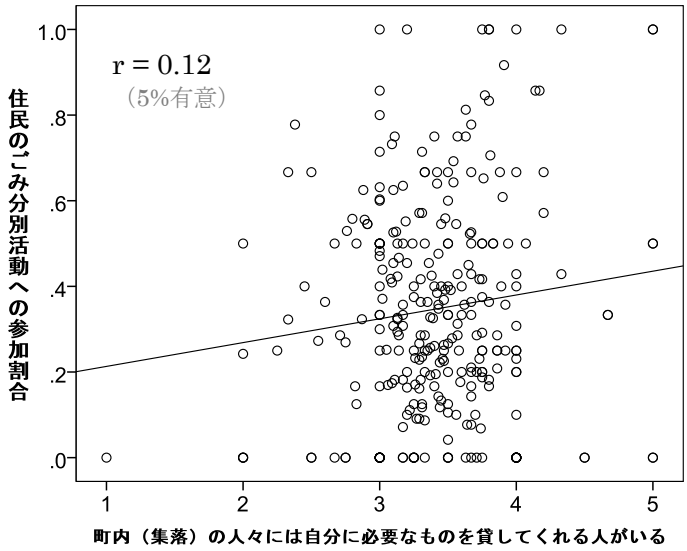


図20．2変数の散布図

- 必要なものを貸してくれる住民が多い（すなわち、住民同士の間に互酬的な関係が成り立っている）地域ほど、住民のごみの分別活動への参加割合が大きい。

４）互酬性の規範

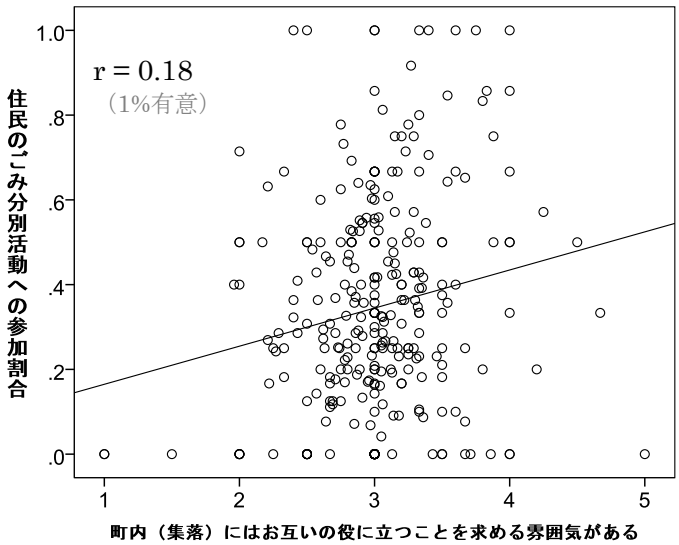


図21．2変数の散布図

- 互いの役に立つことを求める雰囲気がある地域（すなわち、互酬関係を維持しようとする社会規範の強い地域）ほど、住民のごみの分別活動への参加割合が大きい。

b)住民の心理特性

１）周囲の他者のリスク回避志向

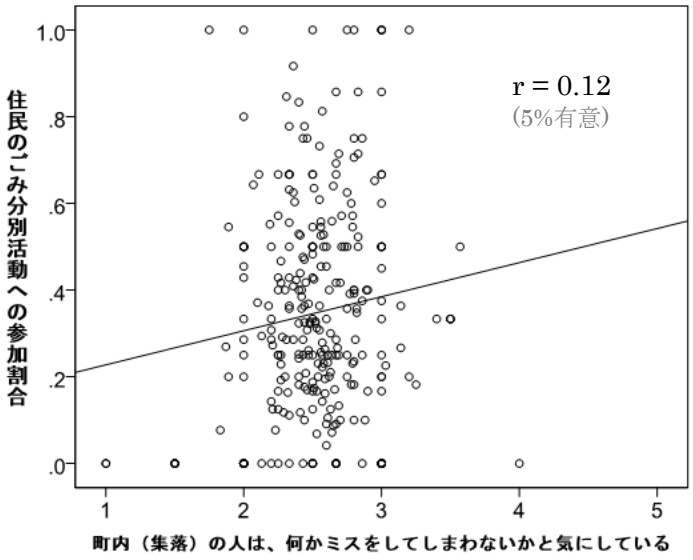


図22. 2変数の散布図

- 周囲の住民はミスを恐れていると互いに思い合っている地域ほど、住民のごみの分別活動への参加割合が大きい（図 22）。地域のゴミ分別活動への参加率は、「集落の人がミスを恐れている」と思うことに関連づけられているといえる。

２）行動の積極性

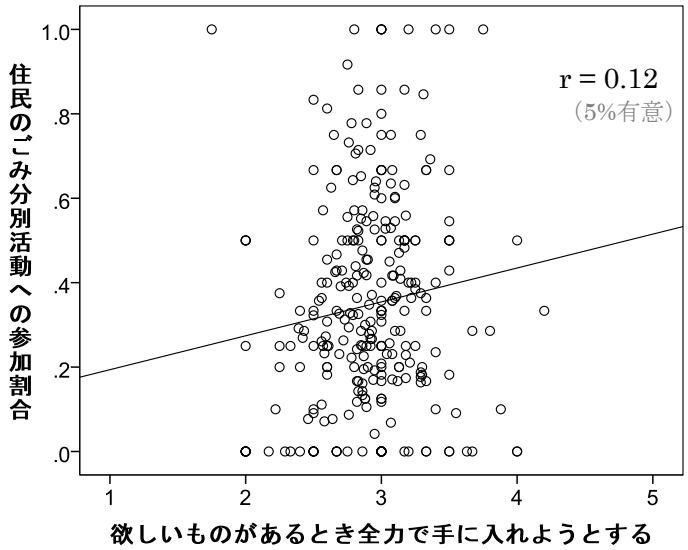


図23. 2変数の散布図

- 住民が、平均して積極的な（欲しいものを全力で手に入れようとする）地域ほど、住民のごみの分別活動への参加割合が大きい。

３）競争主義

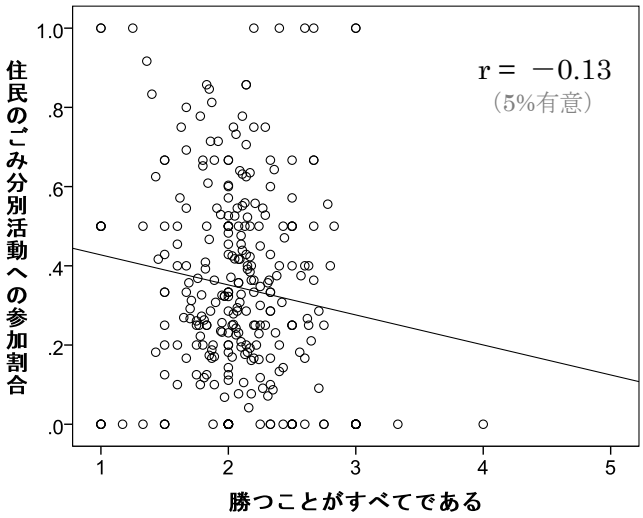


図24. 2変数の散布図

☝ 「勝つことがすべてである」と思っている住民が多い地域ほど、ごみの分別活動への参加割合が小さい。

c)地域の社会・人口学的特性について

１）外出手段：徒歩

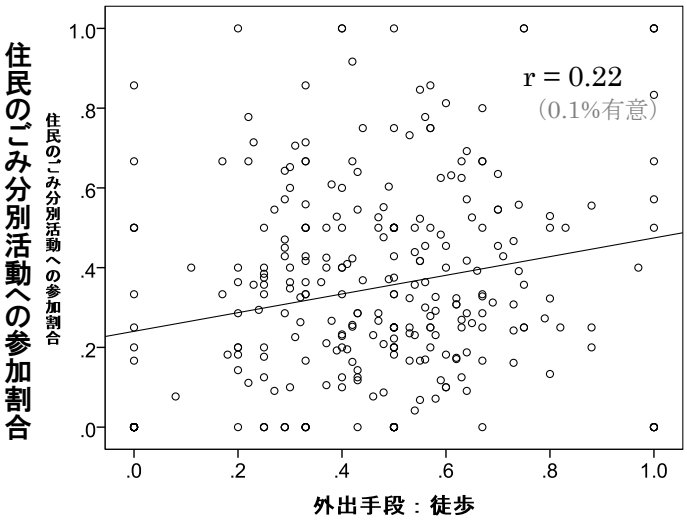


図25. 2変数の散布図

☝ 日常的に徒歩で外出する住民が多い地域ほど、ごみの分別活動への参加割合が大きい。

２）外出手段：自転車

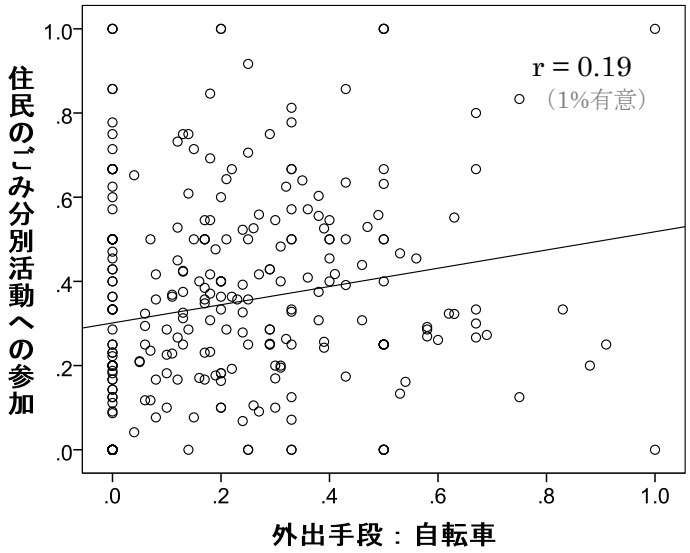


図26．2変数の散布図

☝ 日常的に自転車で外出する住民が多い地域ほど、ごみの分別活動への参加割合が大きい。

３）職場の場所：住んでいる市町村の外

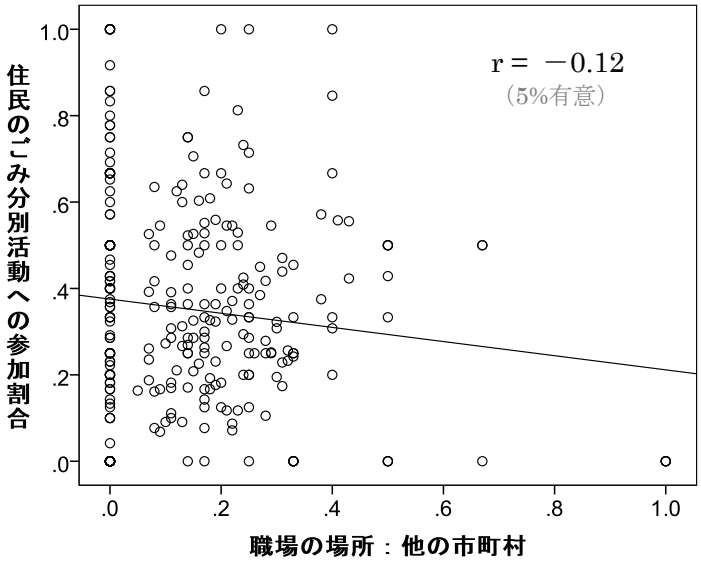


図27．2変数の散布図

☝ 住んでいる市町村の外で働いている住民が多い地域ほど、ごみの分別活動への参加割合が小さい。

４）地域の拠点としてのごみ収集場所

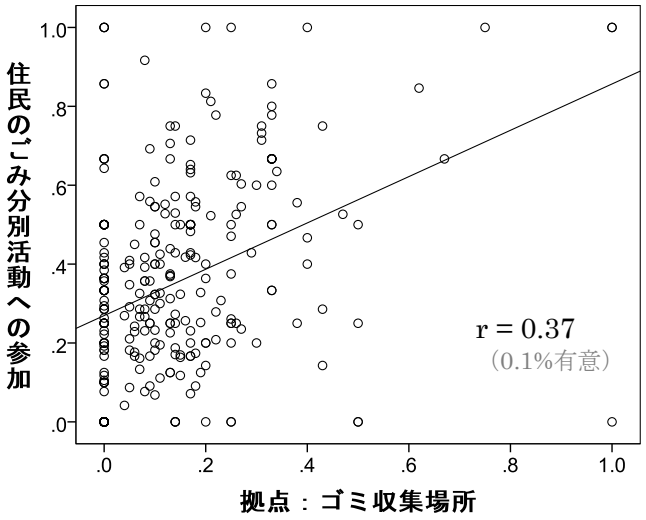


図28．2変数の散布図

☝ 住民のごみ分別活動への参加割合が大きい地域ほど、ゴミ収集場所は地域の拠点（住民が集まりやすい場所）として認識されている。すなわち、ごみ分別活動は必ずしも個人単位で行われるものではなく、活動場所が地域のつながりの拠点としての機能を併せ持つために住民のごみ分別活動を促進している可能性が示唆される。

次に、拠点としてのごみ収集場所の特徴をより深く検討するために、他に拠点として認識されている場所を含んだ因子分析を行った。

●分析：因子分析、相関分析

●項目：拠点に関する項目は、フィールドである京都府北部地域のみで尋ねた特殊項目。以下の拠点をどれほど利用するか評定させた。

●結果：

表21
拠点の因子分析結果

	因子				
	1	2	3	4	5
拠点：駐在所	.612	-.062	.123	-.089	-.012
拠点：介護施設	.495	-.018	-.013	.082	-.015
拠点：役所	.485	.030	-.051	.171	.040
拠点：学校	.427	.119	-.005	.089	-.008
拠点：教会	.203	.011	.012	.129	-.066
拠点：神社	.007	.821	.007	-.028	-.081
拠点：寺	.002	.705	-.001	.031	.019
拠点：ゴミ収集場所	.029	-.030	.489	.007	-.011
拠点：道端	-.219	.016	.489	.176	.035
拠点：バス停	.226	-.038	.478	-.086	-.012
拠点：空き地	.100	.040	.430	-.087	-.049
拠点：移動販売が行われる場所	.097	-.002	.300	-.022	.005
拠点：お店	.109	-.041	.007	.596	-.018
拠点：カフェ・喫茶店・食堂	.119	-.023	-.104	.516	-.044
拠点：病院・診療所	.187	.008	.061	.330	.106
拠点：個人の家	-.120	.113	.201	.322	.061
拠点：その他	.063	.111	.003	-.061	-.403
拠点：公民館	.079	.167	-.042	-.152	.396

注）因子の抽出には最尤法を用い、斜交（プロマックス）回転を行った。

☝ ごみ収集場所が拠点になる地域では、他に、「道端」「バス停」「空き地」が拠点になりやすいことが示された。
☝ 拠点としてのごみ収集場所は、道端・バス停・空き地といった、日々の生活の中で空間が共有されるごく「日常的な場所」であることが提示された。

d)地域における住民のごみ分別活動がもつ効果

１）愛着

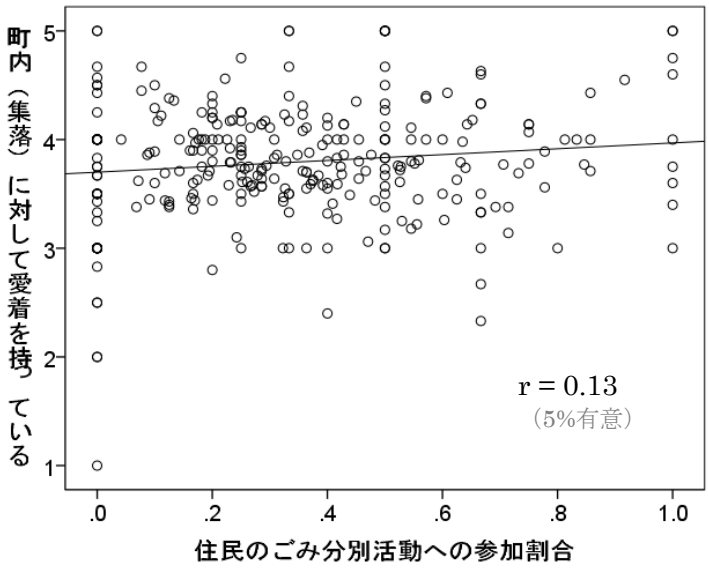


図29. 2変数の散布図

☝ ごみ分別活動への参加割合が大きい地域ほど、住民は自らの地域に対して愛着を持っている。ごみ分別活動によって住民の愛着が醸成される可能性が示唆される。

２）暮らし向き満足度

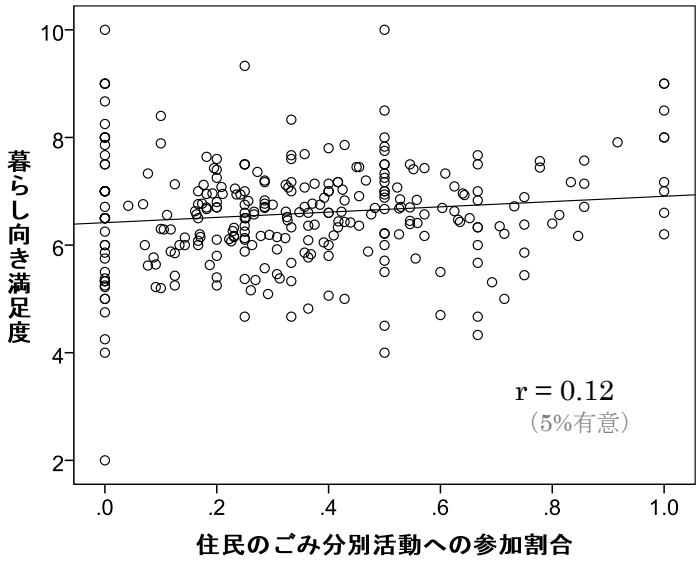


図30. 2変数の散布図

☝ ごみ分別活動への参加割合が大きい地域ほど、住民は暮らし向きに満足している。ごみ分別活動によって住民の暮らし向き満足感が醸成されることが示唆される。

３）畏怖・畏敬の念

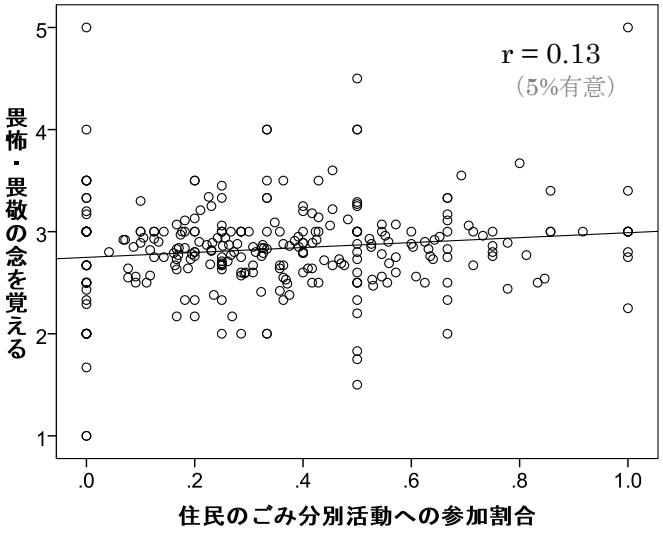


図31．2変数の散布図

☝ ごみ分別活動への参加割合が大きい地域ほど、住民は普段の生活の中で畏怖・畏敬の念を感じることが多い。

（４）地域の開放性と個人の幸福に関する調査

①地域の開放性と関連する要因の分析

排他性は、個人の社会心理現象でもある。ここでは排他的意識という個人の認知を従属変数とし、「距離を跨いだ交流」「世代を跨いだ交流」「向社会的行動」を独立変数として回帰分析を行って検討した。

社会心理学では、外集団（所属集団以外の集団）への否定的態度を改善する手段についての研究が蓄積されてきた。その中でも、特に効果が認められているものが外集団他者との非敵対的接触機会の増進である（Allport, 1954）。排他性の本質が外集団の人間に不安を感じて忌避する個人の心性にあるとするならば（Pettigrew & Tropp, 2008）、排他性は外集団他者と交流する機会が多いほど低減すると考えられる。ここでは様々な他者との交流機会を測定し、排他性との関連を検討した。

交流する他者には様々な種類が存在する。外集団の他者との交流は「距離を跨いだ交流」と言える。同時に、世代の異なる他者間での交流を考えることも可能であり、「世代を跨いだ交流」が存在し得る。さらに、身近な交流として自治体活動（例：ごみの分別など）へ参加することにより、上記の様々な他者と交流することが可能である。これら様々な他者との交流機会が排他性をどのように抑制/促進するか検討した。ここでは、「距離を跨いだ交流」をコミュニケーション地域範囲で、「世代を跨いだ交流」をコミュニケーション世代範囲で、自治体活動への参加を集合活動で測定した。

●分析：個人データによる重回帰分析

●項目：町内の開放性、コミュニケーション地域範囲、コミュニケーション世代範囲、集合活動

●結果：

表 22
町内の開放性を従属変数、コミュニケーション地域範囲、コミュニケーション世代範囲、および、集合活動を独立変数とした重回帰分析の結果

独立変数	B	SE	β	*t*	*p*
自治体活動への参加	0.03	0.01	0.09	6.52	***
距離を跨いだ交流	0.11	0.05	0.03	2.01	*
世代を跨いだ交流	0.29	0.04	0.10	7.20	***

Note. $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

- 距離を跨いだ交流も町内の開放性を説明するが、それより効果が大きいものは世代を跨いだ交流である。本来時間的な広がりを伴う世代を跨いだ交流が外集団という空間的な広がりにおける開放性を強く説明する点は、個人の行動のレベルで多世代性と開放性の正の関係性を示す知見である。
- 交流とは独立に、自治体活動への参加も町内の開放性を高める要因である。単なる交流を越えて、自治体で集合的に行う活動に参加する行為には町内の開放性を高める働きが示唆される。これも、一見内向きの自治体活動参加が、実は町外へのつながりと正の関連にあるという点で、内向き意識と排他性を同一視できない知見である。

②バランスを志向する幸福感の町水準が多面的幸福に与える影響

幸福感には様々な種類が存在することが健康心理学や社会心理学、感情心理学の分野で研究されている。それらの知見によれば、幸福感は、個人的な達成や快楽といった個人内の快過程を背景として感じられる要素もある一方で、所属する集団のために貢献や奉仕をするといった社会的過程を背景として感じられる要素もある(Oishi, Diener, Suh,& Lucas, 1999)。幸福感のこの特徴は、人間のアイデンティティの成り立ち（個人性と集団性）と密接な関わりがある。

個人的な幸福と集団的な幸福を個人性と集団性の両極とすると、前者は「自分自身に満足している」など個人性に依拠したものである。また、後者は「町内の人間関係に満足している」など集団性に依拠したものである。例えば、全体主義的な社会などでは、集団的な幸福が強調されるだろう。ここで、持続性のある幸福には自己と他者の間のバランス（広井, 2016）を拠り所とする要素が必須であるとすれば、それは「自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思う」など、自他の協調性に根ざした要素であると考えることができよう。もし、バランス志向的な幸福が持続可能性を持つならば、この水準が高い地域ほど地域全体としてのなんらかの持続可能な結果が見られて然りである。ここでは、その結果として現れる地域の幸福度と主観的健康感の水準を想定し、これらがバランス志向的幸福感によって予測されるかについて、時系列データを用いて検討した。

●分析：町集約データによる交差遅延モデル（原因変数と結果変数を２時点以上で測定し、過去の原因から未来の結果へのパスの有意性を検定することで、因果関係に迫る分析法）
●項目：幸福度、主観的健康感、自尊心（自分自身に満足している）、バランス志向的幸福感（自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思う）、町内の人間関係満足度（町内の人間関係に満足している）、年齢層、人口密度（基幹統計より）

●結果：

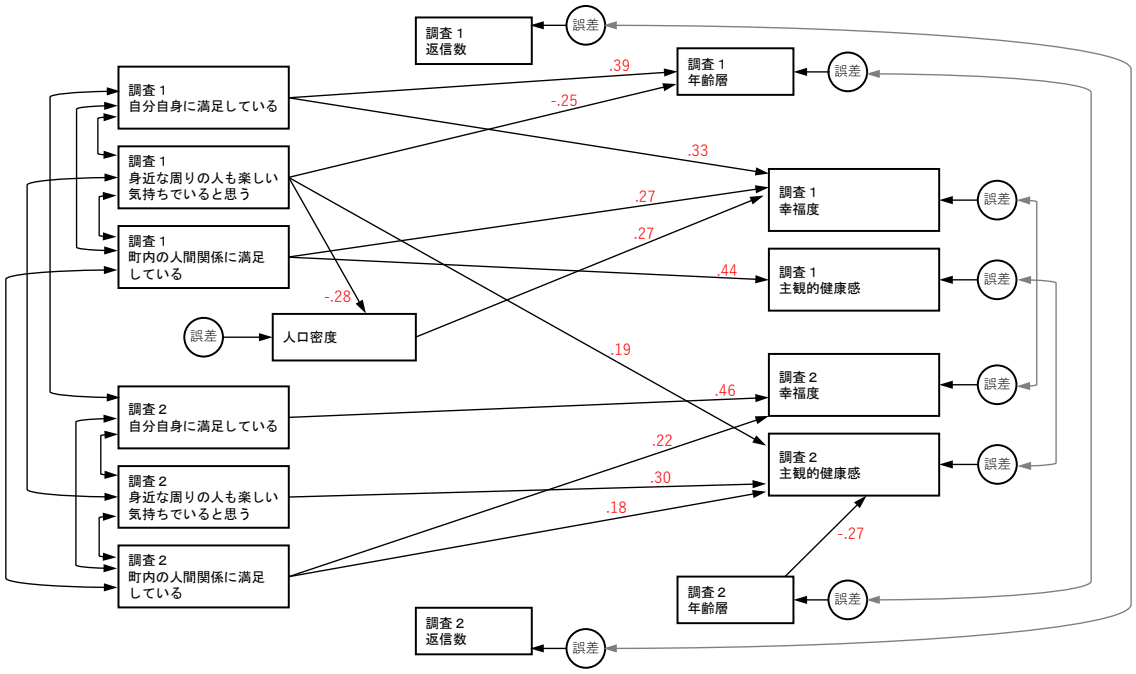


図32. バランス志向的幸福感が主観的健康感へ与える効果（町集約データ）
Note.　統計的に有意な変数間のパスのみ示した.
　　調査1：事前調査、調査2：本調査

☝ 町全体として、自分自身や町内の人間関係に満足している水準は、10 ヶ月後の幸福度や主観的健康感の水準を高めないと考えられる。
☝ 町全体として、バランス志向的幸福感の水準は、10 ヶ月後の主観的健康感を高める効果があると考えられる。

<u>③自他幸福相関が町内の居住年数に与える影響</u>

上記の結果は、言わば、個人の意識内における「自他の協調性」であった。実際に各地域で自らの幸福度と町内の人々全般の幸福度がどれほど相関しているかを「自他幸福相関」として算出し、時系列データを用いてこれが地域の新規参入者の多さを予測するかどうかを検討した。地域として新しい成員が参入することは、地域の開放性にとって不可欠の要素（例：過疎地域は居住年数が長い）として想定し、本分析では「町内への居住年数」の 10 ヶ月間隔での変化を説明するモデルを検討した。

●分析：町集約データによる交差遅延モデル
●項目：幸福度、町内の人々全般の幸福度、町内への居住年数、世帯人数、年齢層、人口密度（基幹統計より）
●結果：

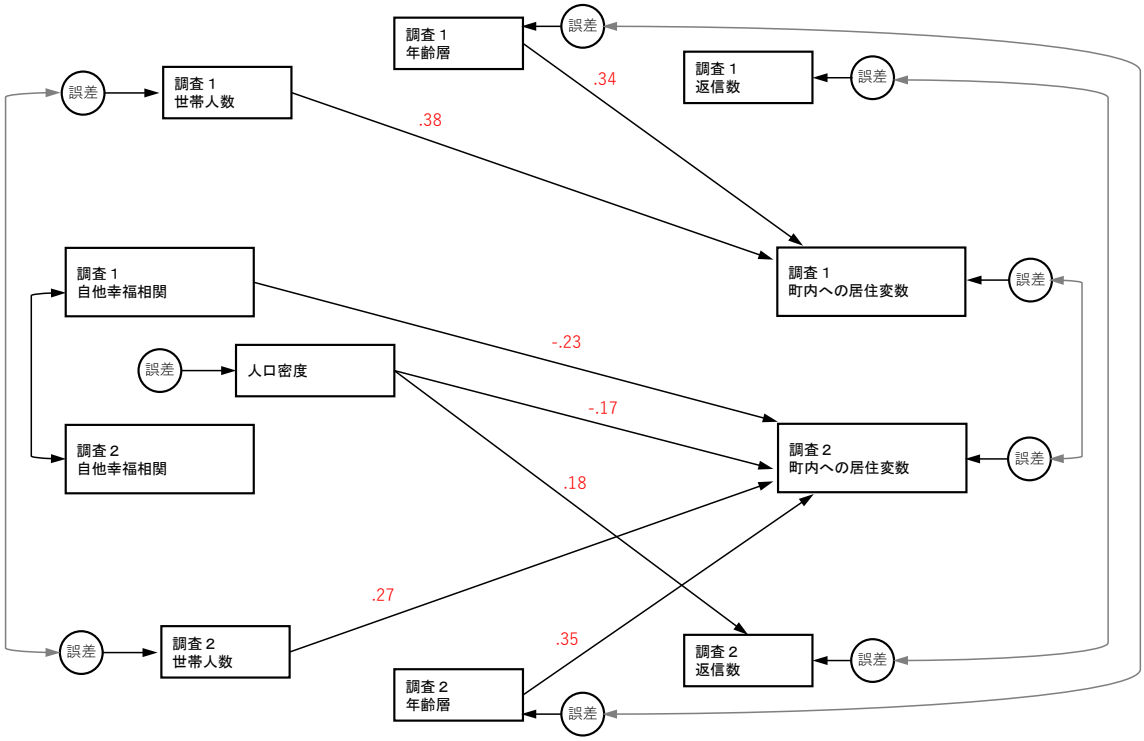


図33.　自他幸福相関が町内への居住年数へ与える効果（町集約データ）
Note.　統計的に有意な変数間のパスのみ示した.
　　調査1：事前調査、調査2：本調査

☝ 町全体として、自他幸福相関が高いと、10ヶ月後に町で暮らす人々の居住年数の水準（平均値）が低い。この効果は人口密度（都市ほど流動的である可能性）、世帯人数の変化（世帯が大きくなり別れることで若い家庭が生まれた可能性）、年齢層の変化（高齢地域では若い家庭が少なくなった可能性）などを統制した上で得られた結果である。すなわち、自他幸福相関は新規居住者を増加させた可能性があり、開放性に正の関連を持つことが示唆される。

④町内の人々に対する信頼が多面的幸福に与える影響

「地域のつながり」を感じている個人は、それによって多面的な幸福がどれほど上昇するのか。例えば、全体主義的な社会においては、「地域のつながり」、あるいは結束型ソーシャルキャピタルが規範的に強要されることによって、人々は不幸や不健康を被っていると考えられる。そこで、10ヶ月間隔で行った調査同士の間で再検査が可能であった個人を対象に、結束型ソーシャルキャピタルの代表的な指標である「町内の人々に対する信頼」が、現在と未来の多面的な幸福をどのように説明するか検討した。ここでは、本調査時点での個人の幸福度と主観的健康感の水準を従属変数とし、これらが事前調査時点での個人の地域内信頼と一般的信頼によって予測されるか検討した。

●分析：個人データによる交差遅延モデル
●項目：幸福度、主観的健康感、町内信頼、一般的信頼
●結果：

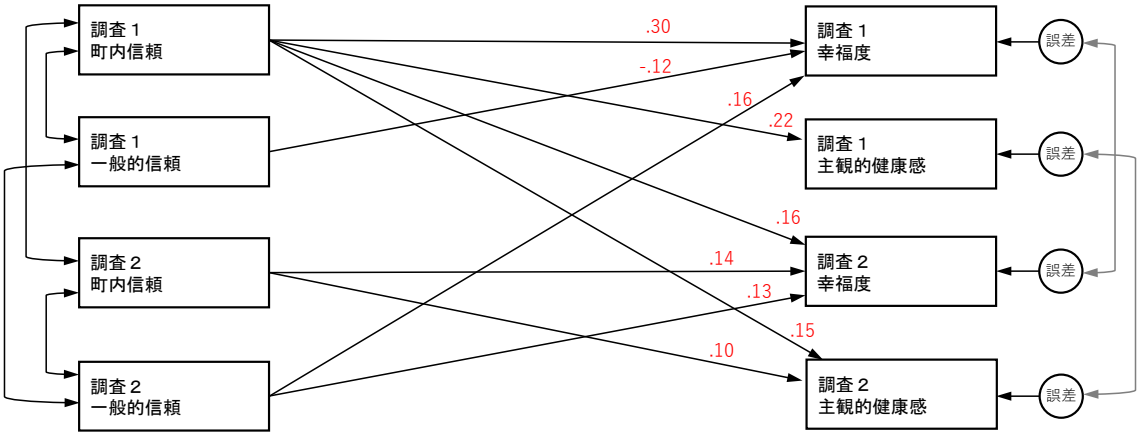


図34.　町内の人々に対する信頼と一般的信頼が、幸福度や主観的健康感へ与える効果（再検査個人データ）
Note.　統計的に有意な変数間のパスのみ示した.
　　調査1：事前調査、調査2：本調査

☝ 町内の人々に対する信頼（結束型ソーシャルキャピタル）が高い個人は、10 ヶ月後に幸福度と主観的健康感が上昇している。すなわち、地域内他者を信頼する者は、幸福度や主観的健康感が高くなる。個人レベルで幸福度の高さに対して示されるこの結果は、町内の人々に対する信頼（結束型ソーシャルキャピタル）は、必ずしも個人を不幸・不健康にするものではないことを示している。

（５）多世代型の向社会的行動の行動指標測定の分析とフィードバック

調査は平成27年12月6日から平成28年1月15日の期間に行った。つねよし百貨店来訪者に、UHF 帯RFIDタグ（図35）をおおよそ100個配布し、来訪時に持参するよう依頼した。また、つねよし百貨店入口付近にRFIDタグリーダを設置し、来訪時刻および滞在時間を分単位で記録した。

図35.　調査システムの概略

このデータを用いて、同じ時間帯に滞在していた者同士をつなぐネットワーク分析を行った。このネットワークは、「つねよし百貨店」という場を介しての直接的・間接的な社会的交流の図として解釈できる。このネットワーク・データから、「接点の多さ」（次数中心性）および「人と人をつなぐ度合い」（媒介中心性）を調査参加者ごとに計算した。

ICタグを用いたネットワーク調査とは別に、同時期（平成28年11-12月）にアンケート調査（地域社会の「つながり」と暮らしについてのアンケート）が実施されていた。そこで、ネットワーク調査データと、アンケート調査データの紐付けを試みた。その結果、23名のデータを紐付けることができた。ネットワーク調査の「接点の多さ」および「人と人をつなぐ度合い」と、アンケートへの回答との相関関係を検討した結果、次の結果が得られた。

●分析：ICタグを用いた実態調査

① 接点の多さ（次数中心性）：つねよし百貨店で多くの人と接点があった人ほど（= つねよし百貨店で多くの人と同時に滞在していた人ほど）、この得点が高くなる

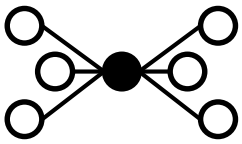


図 36. 次数中心性の例

② 人と人をつなぐ度合い（媒介中心性）：その人がいることでネットワークの誰かと誰かがつながりやすくなる時、この得点が高くなる

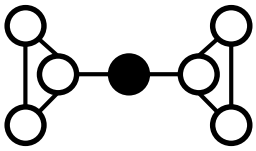


図 37. 媒介中心性の例

●結果：

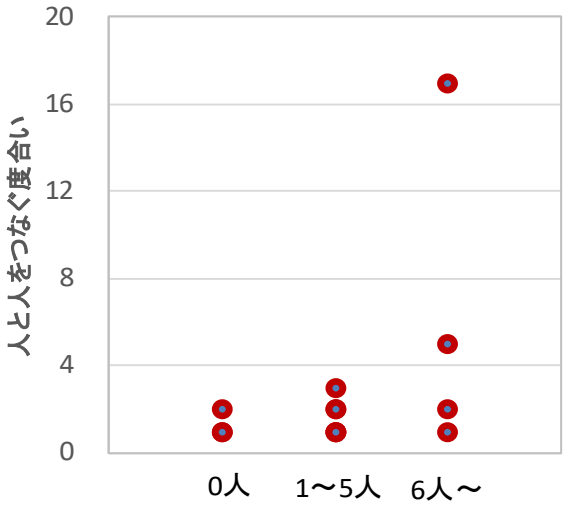


図38. 人をつなぐ度合いとふだん顔を合わせて話す町内の同業者の人数

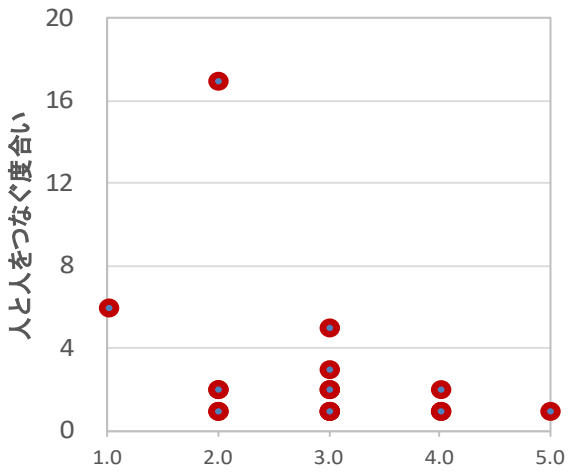


図40. 人をつなぐ度合いとミスを気にする傾向

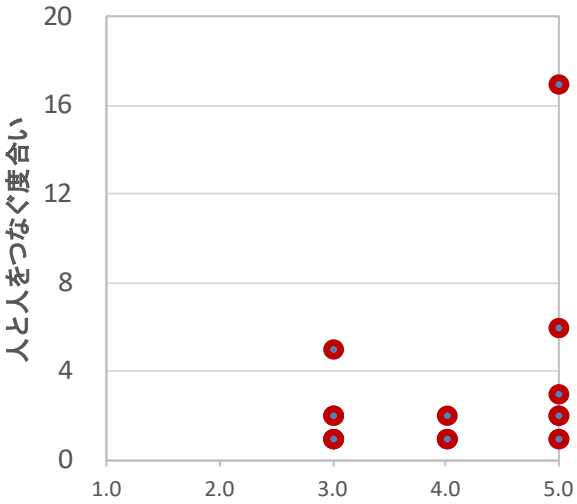


図39. 人をつなぐ度合いと町内への愛着

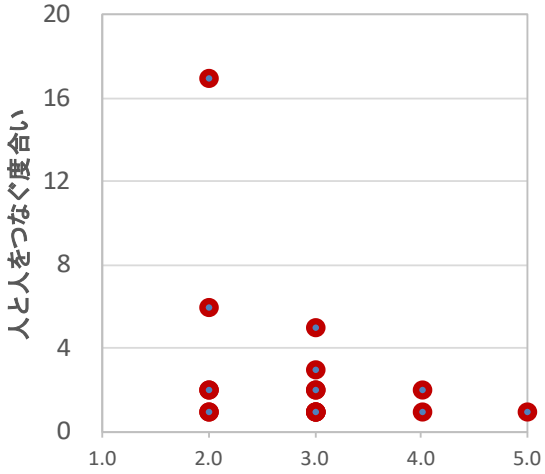


図41. 人をつなぐ度合いと好奇心の強

a)「接点の多さ」との関係

- 集落に長く住んでいるほど、接点が多い
- 自治会に通常参加している人は、接点が多い
- 地域資源の保全（河川・水路の保全など）　に通常参加している人は、接点が多い

b)「人と人をつなぐ度合い」との関係

- 自治会に通常参加している人は、人をつなぐポジションにいる
- 地域資源の保全（河川・水路の保全など）　に通常参加している人は、人をつなぐポジションにいる
- ふだん顔を合わせて話す町内の同業者の人数が多い人は、人をつなぐポジションにいる

- 「私は、この町内（集落）に対して愛着を持っている」と思っている人は、人をつなぐポジションにいる
- 「私は、町内（集落）の人が困っていたら手助けをする」「町内（集落）の人は、町内の他の人が困っていたら手助けをする」と思っている人は、人をつなぐポジションにいる
- 「私は、何かミスをしてしまわないかと気になる」と思っていない人ほど、人をつなぐポジションにいる。また、「私は、好奇心が強い」と思っていない人ほど、人をつなぐポジションにいる。

３－５．会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2016年4月3日	広井教授とのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	広井良典教授を交え、年度の方向性を定めるミーティングを行った。
2016年5月21日	関西社会心理学研究会(KSP) 第433回	大阪電気通信大学	長期間にわたる行動ログデータにもとづくICタグを用いた実態調査について小森が発表した。
2016年5月28日	奥大野ミーティング	奥大野公民館	フィールド地域現地協力者への調査フィードバックを行った。
2016年5月30日	測定チームとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	調査について会合を行った。
2016年6月27日	NPO法人ミラツクとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	インタビュー調査について会合を行った。
2016年8月9日	つねよし百貨店でのミーティング	つねよし百貨店	行動調査について会合を行った。
2016年8月18日	実践チームとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	調査フィードバックについて会合を行った。
2016年8月18日	測定チームとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	行動調査について会合を行った。
2016年	高島市訪問	高島市市役所	NPO法人ミラツクの紹介で、高

8月26日			島市へのIターンリーダーらにインタビューを行った。
2016年8月30日	測定チームと通信業者のミーティング	大阪電気通信大学	行動調査に用いる通信機器について、通信業者とミーティングを行った。
2016年9月20日	NPO法人ミラツクとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	インタビュー調査について会合を行った。
2016年10月4日	要藤准教授とのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	要藤正任特定准教授を交え、ソーシャルキャピタルと調査についての会合を行った。
2016年10月20日	実践チームとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	実践活動について会合を行った。
2016年11月24日	測定チームとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	行動調査について会合を行った。
2016年11月28日	奥大野ミーティング	奥大野公民館	行動調査について、現地住民とのすり合わせを行った。
2016年12月12日	NPO法人ミラツクとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	インタビュー調査について会合を行った。
2017年1月19日	京都大学フィールド科学教育研究センター勉強会	京都大学こころの未来研究センター	生活環境調査の情報を得るため、伊勢主催の勉強会で意見交換を行った。
2017年2月9日	健康体操教室参加	奥大野公民館	実践活動の手がかりを得るため、住民自治会が開催している健康体操教室にて情報収集と意見交換を行った。
2017年3月8日	実践チームとのミーティング	京都大学こころの未来研究センター	調査フィードバックについて会合を行った。
2017年3月14日	奥大野ミーティング	奥大野公民館	行動調査について、現地住民へ開発経過を報告するためにミーティングを行った。
2017年3月15日	年度末ミーティング	京都大学こころの未来研究センター	来年度の計画を新メンバーを交えて共有するミーティングを行った。
2017年3月18日	「ソーシャル・キャピタルの世代間継承メカニズムの検討」プロジェクト合同研究会	新・都ホテル	要藤プロジェクトの情報収集と、今後の研究に向けての意見交換を行った。

４．研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本研究プロジェクトについて、プロジェクト代表者の内田は、本プロジェクト実施地域以外の自治体の担当者と、地域の幸福の測定とフィードバックの方法について意見交換を持つ機会があった。本プロジェクトが進行中であり、パッケージ化された指標は提示する段階ではないことを伝えながら、プロジェクトで実施されている（1）多世代共創の重要性（2）幸福の個別性と地域性の考慮の重要性（3）地域の開放性のあり方への示唆、の3点について講演やディスカッションを行ったところ、指標作成への大きな期待ならびにコンセプトへの大きな賛同が得られ、今後プロジェクト実施期間後の展開についての手応えを得ている。

国際的にはブータンでの学会発表や国際会議参加を通じて、これまでの幸福感研究をあらたに発展させる試みとして、評価を集めることができたため、平成29年度に実施する国際調査などで展開を結実させたい。

５．研究開発実施体制

●運営チーム：

・リーダー：内田由紀子

京都大学こころの未来研究センター　特定准教授

実施項目：地域の幸福の概念整理

概要：地域の幸福の多面的指標を、理論的な観点から整理する。

●測定チーム（概念整理終了後）：

・心理指標班（リーダー：竹村幸祐）

滋賀大学経済学部　准教授

実施項目：心理調査、仮説検証型データ/一般化の検討、開発指標提示/プログラムフィードバック/シンポジウム/フォローアップ、地域の幸福概念整理に向けた議論

概要：概念整理された地域の幸福に基づき、主観的幸福感やソーシャルキャピタル、ならびにそれらの相関関係の地域間比較調査を行う。主に、地域の特徴に関わる巨視的な知見を提供する。

・実態調査班（リーダー：吉川左紀子）

京都大学こころの未来研究センター　教授・センター長

実施項目：実態調査、地域の幸福概念整理に向けた議論

概要：多世代共創の生じる地域拠点に関わる住民の主観的幸福感や健康感、社会関係に関する調査を行う。主に、地域住民と地域拠点の相互作用に関する実践的な知見を提供する。

●実践チーム（概念整理終了後）：

・イベント班（リーダー：内田由紀子）

京都大学こころの未来研究センター　特定准教授

実施項目：人々のインタラクション分析と生涯学習プログラムによる都市農村交流の効果検証、暫定指標による指標構成・プログラムフィードバック、地域の幸福概念整理に向けた議論

概要：多世代共創の生じる地域拠点や地域イベント、学習プログラムの効果を、地域の幸福の暫定指標によって測定し、地域にイベントの効果をフィードバックする。地域政策に資する知見を提供する。平成28年度は拠点強化についての実践活動の取り組みを実施する。

・環境と「場」班（リーダー：伊勢武史）

京都大学フィールド科学教育センター　准教授

実施項目：環境配慮行動を用いた多世代学習、地域の幸福概念整理に向けた議論

概要：地域の幸福に資する環境・社会的文脈の調査を行うと同時に、現在地域で自発的に実践されている取り組みに対する評価とフィードバックを行う。地域の幸福の概念整理、地域の幸福のあり方に影響するマクロ変数を明らかにする知見を提供する。平成28年度には、環境教育についての実践活動の取り組みを開始する。

６．研究開発実施者

名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職（身分）
吉川左紀子	ヨシカワ　サキコ	京都大学	こころの未来研究センター	教授・センター長
小森政嗣	コモリ　マサシ	大阪電気通信大学	情報工学科	教授
竹村幸祐	タケムラ　コウスケ	滋賀大学	経済学部	准教授
福島慎太郎	フクシマ　シンタロウ	青山学院大学	総合文化政策学部	助教
一言英文	ヒトコト　ヒデフミ	京都大学	こころの未来研究センター	特定研究員
金子祥恵	カネコ　サチエ	京都大学	こころの未来研究センター	大学院生（D3）
打田篤彦	ウチタ　アツヒコ	京都大学	大学院人間・環境学研究科	大学院生（D1）
パメラ・テイラー	パメラ　テイラー	京都大学	京都大学大学院人間・環境学研究科	大学院生（M2）
中山真孝	ナカヤマ　マサタカ	京都大学	こころの未来研究センター	研究員
野崎優樹	ノザキ　ユウキ	京都大学	こころの未来研究センター	研究員
宮脇　僚太	ミヤワキ　リョウタ	大阪電気通信大学	工学研究科	大学院生（M1）
山下　智宏	ヤマシタ　トモヒロ	大阪電気通信大学	情報工学科	学部生
川畑　光希	カワバタ　ミツキ	大阪電気通信大学	情報工学科	学部生
釜淵　颯太	カマフチ　フウタ	大阪電気通信大学	情報工学科	学部生

氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職（身分）
内田由紀子	ウチダ　ユキコ	京都大学	こころの未来研究センター	准教授
清家　理	セイケ　アヤ	京都大学	こころの未来研究センター	特定助教
伊勢武史	イセ　タケシ	京都大学	フィールド科学教育センター	准教授

７．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

７－１．シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2016年6月27日	調査報告会	奥大野公民館	45名	大宮南地域里力再生協議会において、調査結果のフィードバックを行った。
2016年6月28日	調査報告会	つねよし百貨店	8名	つねよし百貨店において、調査結果のフィードバックを行った。
2016年8月12日	調査報告会	南太秦自治会	5名	京都市南太秦学区の自治会において、調査結果のフィードバックを行った。
2017年3月2日	健康に関するワークショップ	奥大野公民館	22名	フィールドである大宮町にて、健康に関するワークショップを開催した。

７－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

（１）書籍、DVD

・　タイトル、著者、発行者、発行年月等

“Interdependent happiness: Progress and implications.” Hidefumi Hitokoto & Yukiko Uchida. Edited by: Melikşah Demir, Ph.D. Northern Arizona University, Flagstaff, AZ, USA. Nebi Sümer, Ph.D. Middle East Technical University, Ankara, Turkey. "Close Relationships and Happiness across cultures." Publisher: Springer. (in press)

文化とこころ－こころへの社会科学的アプローチ、内田 由紀子、吉川左紀子・河合俊雄（編）「こころ学への挑戦」(pp.193-219)、創元社、2016年

「我」と「場」の幸福論、内田 由紀子、広井良典・大井浩一（編）「2100年へのパラダイムシフト」(pp.92-94)、作品社、2017年

健康と文化、内田由紀子・一言英文・中尾元、鈴木伸一（編）「健康心理学測定法・アセスメント」(pp.193-212)、ナカニシヤ出版、2016年

（２）ウェブサイト及びSNSアカウント等構築・運営

・　サイト名、URL、立ち上げ年月、今年度の主な発信内容等

（３）学会（7-4. 参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・　シンポジウム等の名称、演題、年月日、場所

Uchida, Y. (Kokoro Research Center Kyoto University). Interdependent happiness for

sustainable society. Seminar: Culture and Well-being：Philosophy and mind. "Inerdependent Happiness" for sustainable society,2017年2月, Kyoto University Kokoro Research Center.

小森政嗣（大阪電気通信大学情報通信工学部）、関西社会心理学研究会(KSP)、長期間にわたる行動ログデータにもとづく社会ネットワーク分析、2016年5月、大阪電気通信大学寝屋川駅前キャンパス

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、第76回岩手県総合計画審議会、いま「幸福」を考える、2016年6月、盛岡市

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、ブータン～しあわせに生きるためのヒント～（日本・ブータン外交関係樹立30周年記念事業）、いま、幸福を考える～「しあわせの国」ブータンを通して見る日本～、2017年2月、岩手県民会館

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、産業競争力懇談会、つながりがもたらす新しい価値と幸福：文化心理学からのマクロ・マイクロインタラクションアプローチ、2016年5月、パナソニック東京本社

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、第100回指導神職研修、地域の幸福を支える社会的つながり、2016年12月、伊勢市

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、文化と幸福について考える、2016年11月、大阪府立北野高校

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、国際共同シンポジウム「超高齢社会の未来まちづくり～持続的に発展する地域とライフサポート」、幸福感とまちづくり、2017年1月、京都大学

７－３．論文発表

（１）査読付き（ 2 件）

●国内誌（ 0 件）

●国際誌（ 2 件）

Takemura, K., Hamamura, T., Guan, Y., & Suzuki, S. Contextual effect of wealth on independence: An examination through regional differences in China. Frontiers in Psychology, 7, Article-384 2016.

Uchida, Y., & Oishi, S. The happiness of individuals and the collective. Japanese Psychological Research, 58, 125-141. 2016.

（２）査読なし（ 1 件）

内田由紀子、幸福感研究と指標活用、生活協同組合研究、11月号, pp.12-19、2016年

７－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（１）招待講演（国内会議 2 件、国際会議 0 件）

- 内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、コミュニティの幸福について考える（招待シンポジウム）、日本ポジティブサイコロジー医学会、龍谷大学、2016年10月
- 内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）、地域の幸福とは何か：文化心理学からの考察、日本社会心理学会第60回公開シンポジウム「幸福感の社会心理学―富山県、福井県、石川県に住む人々の幸福感はなぜ高い？！―」、富山大学、2016年11月

（２）口頭発表（国内会議　2　件、国際会議　4　件）

Takemura, K., Hamamura, T., Guan, Y., & Suzuki, S. Disentangling effects of society-level wealth and individual-level wealth on independence: An examination through regional differences in China (Symposium). 2017 International Convention of Psychological Science Vienna, Austria. 2017年3月

Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima,S. “Farming cultivates a shared culture within a community: Examining the macro-level effects with multilevel analysis in farming and fishing areas (Symposium).” The 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology Nagoya, Japan. 2016年8月

Hitokoto, H., & Uchida, Y. (Kokoro Research Center Kyoto University) The interdependence of happiness: Its measurement validity and concept application. The 23rd congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology Nagoya, Japan. 2016年8月

Fukushima, S., Uchida, Y., Takemura, K., & Hitokoto, H. Collective Happiness: Community Social Capital Reinforces the Association Between One’s Own Happiness and One’s Neighbors’ Happiness. The 23rd International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology Nagoya, Japan. 2016年8月

小森 政嗣（阪電通大）・一言 英文（京大）・竹村 幸祐（滋賀大）・打田 篤彦・内田由紀子（京大）、農村集落の地域店舗を介した社会的接触―無線タグによる予備的調査―、電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループ（HCG）主催HCGシンポジウム2016、高知県高知市、高知市文化プラザかるぽーと、2016年12月

竹村 幸祐（滋賀大）、集合知を支える相互独立文化: 文脈効果の検討、日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学、兵庫県西宮市、2016年9月

（３）ポスター発表（国内会議　1　件、国際会議　0　件）

打田 篤彦・内田 由紀子・一言 英文（京大）・竹村 幸祐（滋賀大）、地域の価値の共有感と社会関係資本―京都府の都市・農村部を比較して―、日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学、兵庫県西宮市、2016年9月

７－５．新聞報道・投稿、受賞等

（１）新聞報道・投稿（　8　件）

- 内田由紀子、毎日新聞、2016年7月23日、多世代共生についての深い議論必要
- 内田由紀子、毎日新聞、2016年9月17日、待機児童は社会の共通課題
- 内田由紀子、毎日新聞、2016年10月15日、基礎研究育成する風土を
- 内田由紀子、東京新聞、2016.12.19、幸せ高める前向き思考
- 内田由紀子、宮崎日日新聞　、2017.1.14、"みやざき幸福論　幸せ反映どこまで　識者で評価分かれる「幸福度ランキング　過度な競争生む恐れ」"
- 内田由紀子、岩手めんこいテレビ、2017.2.2、いま、幸福を考える　ブータンを通して見る日本
- 内田由紀子、岩手日報、2017.2.3、共生や充足感が幸福へのヒント（盛岡・ブータン展講演回）
- 内田由紀子、毎日新聞、2017.2.21、"富の再分配の時代へ　社会の幸福にどう貢献（寄り添う　スペシャルインタビュー）"

（２）受賞（　1　件）

- 内田由紀子、日本心理学会国際賞奨励賞受賞（2016年11月）

（３）その他（　0　件）

７－６．知財出願

（１）国内出願（　０　　件